

やはり俺が吸血鬼なの
は間違っている。続

角刈りツインテール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「いや、いきなり修学旅行つてまじかよ……」

生糀のぼつち……とももはや言い難くなつた根暗少年・比企谷八幡は、キスショット
を救い自分も人間もどきとして生きていくことを決めた―――しかしそこで彼
の物語は終わりではなく、むしろ始まりだつた。

『一度怪異に遭つてしまふと再び怪異に遭いやすくなる』

専門家・忍野メメのその予言の如き言葉通りに、八幡の学校生活は怪異で溢れ始める。
猿の手。

重し蟹。

障り猫。

迷い牛。

彼の出遭いは八幡に、彼の周囲に何をもたらすのか――

※『やはり俺が吸血鬼なのは間違っている。』の続編ですがこちらから見ても問題はありません。ただ原作物語シリーズと同じ流れになるだけです。

←前作

<https://syosetu.org/novel/272841/>

目次

ゆいモンキー	29
001 そして俺の青春ラブコメは再び回り始める。	39
002 それを人は初デートと呼ぶ。	1
003 悪くはないが、少なくとも向いてはいない。	44
004 比企谷八幡は、傷物たちの過去を物語る。	6
005 水族館デート、それはファイクションである。	15
006 土産屋には時折怪しいものが	22
007 せめてバスの車内くらいは落ち込みたい。	55
008 されど休みは始まらない。	61
009 比企谷八幡の心は乱れ、奉仕部の波も乱れ始める。	49
010 そして、あの夢の続きが始まっている。	55
011 そもそも俺が女子の部屋にいるなんてありえない。	61
012 由比ヶ浜結衣は力なく笑う。	69
(前)	69

012 由比ヶ浜結衣は力なく笑う。

(後)

75

013 忍野メメは、これの持ち主を
知つていてる。

82

014 猿は去らずにあくまで嗤い続
ける。

90

015 それでは吸血鬼を始めよう。

96

前

後

103

015 それでは吸血鬼を始めよう。

1 001 そして俺の青春ラブコメは再び回り始める。

ゆいモンキー

001 そして俺の青春ラブコメは再び回り始める。

『一度怪異に遭つた者は再び怪異に遭いやしくなる』

これは忍野のこぼした言葉で、それを聞いていたから多少の覚悟はあつたのだが。あつたはずなのだが。

まさか——それが他人にまで及ぶなんて考えてもみなかつた。

これは俺——比企谷八幡が地獄のような時間を乗り越えた頃の話だ。

◆? ◆? ◆?

ダイイチワ
第壱話
結衣モンキー

◆? ◆? ◆?

「まじか……」

俺は担任の平塚先生によつて板書された文字を見る。見間違えではないのかと何度も何度も確認するもそれが事実であることの証明にしかならなかつた。

班長決め、という文字の横に班名が書かれており、その横には葉山を筆頭に陽キヤビもの名前が連なつてゐる。そこまではいい。いつも通りの光景だ。

そして本題はここからだ。聞いて驚け見て驚け。

そのメンバーのなかに俺の名前があつたのだ。
デジャブである。

「平塚先生……これは一体どういうことですかね」

「ん？ ああ、それは数週間サボつた挙句授業中睡眠をとつていた君への罰だ」

「一つ。サボりではありませんインフルです。二つ。えーーーっと……」

弁解の余地がなかつた。先生の目が痛い。

「とにかく俺は班長なんてしませんよ」

「おいおい比企谷。この時期にインフルとかないだろ？ つくならもつとマシな嘘をつけ」先生は深いため息をついた。「……まあ、お前の目を見たらなんかあつたつてことくらいは分かる。妹関連か？ というわけでこれくらいで許してあげる私の優しさに感謝しろよ」

そう言つて拳を天高く突き上げながら去つていつた。なにわら海賊団だよ。あんた

とソウルメイトになつた覚えはねえんだけど……。

ていうか俺の目どうなつてんだ？ 更に腐つてたりするのだろうか…あとでトイレで確認しどくか。

「あ……ヒツキー」

呆然としていた俺に話しかけたのは由比ヶ浜だ。なんていちいち言う必要もないだろうけども。この世界で俺をヒツキー呼ばわりするのはこいつだけだ。

「えつと、その、なんていうか……よろしくね？」

そう言うだけ言つて陽キャグループへ戻つて行く。ひゅーひゅー、と騒ぎ立てているのが聞こえるが無視して俺も席へ戻る。

俺と由比ヶ浜は付き合つている。

……なんて一言で言い表せるほどに単純な関係ではないのだが、詳しくは前作をご覧いただこう。

ちなみに俺と由比ヶ浜の噂は何故かすぐに広まつた。あいつとの噂は一切流れてこないのに… 絶対に由比ヶ浜が匂わせた。そうとしか思えない。何だ、インスタでストーリーにでもあげたのか。インスタやつてないからストーリーが何なのかいまいちよく分からんけど。

いやそれにしてもだろ。なんでたつた二日間でこうもバレるんだよ。

閑話休題。

あの地獄を乗り越え、土日を満喫しての（溜まりまくっていたプリキュアの録画を見まくつた。小町に引かれた。）月曜日だったのだがどうも疲れが取れておらず、3限目で総合学習の時間なんて無意味な時間がやつてきたからさて寝るかと思つたらこの有様である。我ながら滑稽だ。吸血鬼時代はいくら睡眠不足でもこんなことならなかつたんだけどなあ、とあの時間に思いを馳せる。別に戻ろうなんて思わんが嫌いではなかつた。だから俺は。

キスショットを助けたのだ。

……あ、今はキスショットじゃないのか。

——吸血鬼の搾りかす。

——俺が生かしてしまつた、人間でも吸血鬼でもない何か。

まあとにかく授業中の昼寝に対する言い訳をさせてもらうと俺は久しぶりの人間生活に慣れていたかったのだ。体の退化に頭が追いついていない。まあ勿論それを先生に言うつもりはないものの、やはり不服なものは不服である。ふふふ、いつか先生にぎやふんと言わせられる時が楽しみだ……なんてニヤけていたら横から女子の小さい悲鳴が聞こえた。俺に対してのものではないと信じたい。

…… 閑話休題。何回すればいいんだよ。

うちの学校の修学旅行は自分のクラスのメンバーで構成された3人班だ。ちなみに読者諸君はご存知ないとと思うので述べておくが俺は生糞のぼつちなので友人は片手で数えられるほどしかいない。少なくともこのクラスに会話できる人間は2人だけだ。他クラスを含めると4人ほどだろうか。見ろ、もはや片手でさえ余っている。

1人は由比ヶ浜結衣。
では、もう1人はどうと――

「八幡」

おつと、噂をすれば。

彼女……いや、彼こそが俺の数少ない友人であり唯一無二のマイエンジェル・戸塚彩加である。

002 それを人は初デートと呼ぶ。

変なところで話を切り替えてしまったので戸塚に何かがあるのだろうかと訝しんだ
読者もいらつしやるだろうが気にする必要はない。何故なら深い意味などないからだ。
まあ強いて言えば俺が戸塚の可愛さを強調したかったという一面はあつたかも知れな
いが。ほら、体言止めとかああ言う感じの…。

「ちよつと八幡！・聞いてる!?」

不意に戸塚の声で現実へと呼び覚まされる。

「ん？あ、ああ……おう、聞いてるぞ。聞いてる聞いてる」

まずい、くだらないモノローグのせいで一ミリも聞いてなかつた。恐らく修学旅行関
連の話なのだろうが一体なにを言つていたのだろう……適当に返事してしまつた記憶
もあるんだが大丈夫だろうか。

「じゃあそそういうことだから土曜日12時にららぽーと集合ね！」

「ちょ……」

戸塚はたたた、と立ち去つてしまつた。

土曜日にららぽーと。

デートじゃね、それ。

まじかよ天才陽キヤかよバイブス上がるじやねえの……！

「うつしや」と小さくガツツポーズを決め歓喜を表現した。本当はそれくらいで表現できるような喜びではないのだがここは公共の場だ。T P O は弁えている。その結果現在、外面は冷静を保っているが頭の中はお祭り騒ぎなのだ。戸塚とデートだ！ 戸塚とデートだ！ と脳内神輿もひと段落ついたところでその場所について思い出す。

「……ららぼーと、か」

その場所といえば俺は彼を思い浮かべざるを得ない。

金髪で、常にニヒルな笑みを浮かべていた吸血鬼と人間のハーフにして吸血鬼ハンターのあの男——エピソードである。

そういうえば、あいつらつてどう生活を送っているんだろうか。まさか給料をくれる上司がいるわけではあるまい。だとすれば殺した吸血鬼から、とか……いや流石に吸血鬼に金錢を望むのは馬鹿だ。何せ血液以外の食事を必要としないのだから金も必要ない。

だつたら本当にどうやつて……ううむ、謎は深まるばかりだ。いつか忍野にでも聞いてみようか。そんなすぐに忘れてしまいそうななしよりもない疑問を胸に俺は次の授業の準備を始めた。

数2。

俺が最も嫌いな教科である。

つか俺、まだあいつらとさえデートしてねえんだが……。

♦？♦？♦？

さて、迎えた土曜日の朝。俺は約束時間の一時間前にららぽーとに到着していた。馬鹿じやねえの。まあ開店時間前にならなかつただけマシだ。小町に引き止められていなかつたら9時には家を出ていたはずだ。馬鹿じやねえの。

それにもしても朝早くからとんでもない人数だ。流石我らがららぽ。そこに痺れる憧れる。とはいえる人だかりのほとんどは子供づれとカツプルであり、俺の得意な透明化を試みようとしても目線が集中しているのを肌で感じてしまう。まあこんな朝から腐った目をしてる奴が一人で椅子に座つてたら見るわ。俺だつて見るもん。

「特にすることもないしなあ……」

マツ缶でも買うか、と近くの自販機を脳内検索しつつ立ち上がろうとすると。

「あれ、ヒツキー！」

犬を連れた由比ヶ浜と目があつた。

「えつちよつとなんで目逸らすの!?」

♦？♦？♦？

「ふうん……彩加ちゃんと買い物かあ……」

じろりと睨まれた俺はウサギのように縮み上がる。

「いや、まあその、すまん……」

「ヒツキーの初デート貰いたかつたのに……それにあんな提案してきたことにだつて私はまだ怒つてるんだからね？」

「返す言葉もございません」

お前までただの買い物をデートって言い出しやがった。

ちなみにあんな提案、とは勿論二股のことである。近頃似たような設定の漫画があつたために親近感すら感じるが普通に許されざる行為である。皆は真似しないようによう。俺みたいになんなよ。

いやでも、あの状況でどちらかを断り切れる男子なんて存在しないと思う。どちらを選んでも奉仕部内が気まずくなるし（だつたらどつちも断れつて感じだが）第一個人的にどちらも良い。

物凄く良いのだ。

雪ノ下は分かりやすいおしとやかな性格……と思わせておいての実は毒舌キャラ、というギャップが良い。体のある部分が少し足りないとは思うもののどこかのアニメで言つていたようにそれは希少価値でありステータスなのだ。

由比ヶ浜はそれとは対照的な快活な所謂誰にでも好かれる女の子という感じで良い。

あの陽キヤグループに属していることだけは気に食わんが彼女自身に欠点はほとんどない。精々バカなくらいだ。今更ながら何なんだやつはろーって。

「？どつたのヒツキー」

顔を見すぎてしまつたじやらだろうか、由比ヶ浜が不思議そうに尋ねる。事実を伝えるわけにはいかないので「何でもねえよ」と返す。心なしか不満げなのは見なかつたことにしよう、うん。

「……あのさ、彩加ちゃんがくるまでまだ時間あるんだよね？」

口調を変え、恐る恐るといった感じで聞いてきた由比ヶ浜に俺は胸の鼓動を昂らせた。今心拍を測つたら確実に180くらいはある。

「……まあ一時間くらいはあるな」

「どんだけ早くきたの……？」由比ヶ浜は引き気味に言葉を返した。「まあいいや。それでさヒツキー、良かつたら、その……」

由比ヶ浜は頬を赤らめながら言つた。

「今から私と、デ、デートしない？なんちやつて、あはは……」「する」

俺は即答した。

003 悪くはないが、少なくとも向いてはいない。

俺は今、危機的状況に立っている。

早速だがかの有名な（？）葉山隼人を具体例としてあげよう。彼は陽キャグループの中心のような人物で、誰にでも愛想良く振る舞う聖人君主の擬人化のような男だ。俺はその辺りが気に食わないと思っているのだがその話はおいおいしていくことにしよう。今大事なのは彼が陽キャグループに所属しているという部分だ。当然その中には女子もいて、俺の観察眼では恐らくそいつは葉山に好意を抱いており、加えて葉山もそれに気が付いている。しかし彼はそんなことで狼狽えない。それどころか2人で放課後にサークルへ向かう所を目撃したこともある。

だがしかしそれは『葉山だから』成せる技であり、クラスのぼっちが女子とサークルワンに行つたとしても気まずくなるだけだ。まあそもそもぼっちに出かけれる友人がいるかどうかすら危ういところではあるが：その典型例が俺である。

女子とデートなんてしたことないのだ。なのに俺は今、なんの心の準備も無しにそれを行なつてている。

「…………。」

氣つつつつまづつつつつ!!!

嘘、こんなことになるの？付き合う前でも2人になることは時々あつたけどここまで静かになるなんてことはなかつたぞ。やつぱりリア充つて大変だ。俺には向いていないらしい。

——そう思つたのも束の間のことだ。

由比ヶ浜の耳が真つ赤に染まつているのを見て、一瞬にして手のひらを返してしまつた。

悪くないじやん、リア充。

「あのさヒツキー、あのあと、変なこととか無かつた？」

「変なこと…とかはまあ無えけど。何、心配してくれてんの？」

「くくくッ!!ベ、別にそんなんじやないから！や、やだなあもう!!勘違いしないでよ

…ツ」

二次元でしか見たことないレベルの恐ろしいツンデレだつた。やだ可愛い。

「…お前さ」

「ん？ 何？」

「…俺でいいのか」

俺の言葉を聞いたのち由比ヶ浜は暫く静止した。そして「ふふ」と小さく笑う。

「ヒツキーがいいんだよ。誰が何と言おうと私はヒツキーのことカッコいいと思つて
る」

普段通りを装つて言つたのだろうが彼女の耳は更に真つ赤に染まつていた。無理し
て言わんでもいいのに…。

——俺がいい。

初めて言われたな、そんなこと。

「で、何すんの」

「そうだなあ：あ、そうだ正月にサーテイワンの福袋で貰つた券があるから食べない？」
「何お前エスパーなの？」

「へ」

由比ヶ浜は不思議そうな顔でこちらを見つめてきた。まあそりやそうなるわな。俺
のモノローグをこいつが聞いてる訳ないし「なんでもない」と返した。

行き先が決まつたところで、俺たちはエスカレーターに乗つた。

「ヒツキー何食べる？」由比ヶ浜が問う。

「チヨコミント」俺は即答した。小町と行く時はいつもこの味を食べている。

「チヨコミントか：私あんまり好きじゃないんだよね～あれ」

「勿論歯磨き粉とか言つたらどうなるか分かつてるよな？」

「うちら恋人だよね!? なんで日常会話で脅しかけてくるの!?」

俺は冗談冗談、と顔も見ずに返した。今由比ヶ浜の顔を見たら頬が緩むのは間違いない。

「…やっぱ楽しいなあ」という独り言が聞こえたのは聞こえなかつた事にした。

◆?
◆?
◆?

ようやく目的のサーティワンに到着。久しぶりの店舗に年甲斐もなくついワクワクしてしまつ。

「えつと…チョコミントと…ベルギーチョコと…モンブランで！」

「あ、すんません」

由比ヶ浜が慣れた様子でアイスを注文していき、言い終わろうとするその瞬間になつて俺は「チョコミントじやなくてマスクメロンで」と変更した。
由比ヶ浜がぽかんとしてこちらを見てくる。

べ、別に由比ヶ浜と分けられる味にしたとかじゃないんだからねつ！

004 比企谷八幡は、傷物たちの過去を物語る。

「……あ！八幡と由比ヶ浜さん！……つてあれ、どうしたの2人とも顔真っ赤にして。熱でもあるの？」

誰かに休日出勤を命じられるたびに風邪を理由に無視してきた俺だから信用度としてはゼロに近いのだが、別に熱があるわけではない。今回ばかりは本当だ。

簡単にいえば『なんか恋人っぽいことをやろう』という由比ヶ浜の浅はかな提案によつてあーんされそうになつたのだ。あと少しで、というところで俺が後ろのエスカレーターから戸塚が上つてくるのを目視し慌てて由比ヶ浜にアイコンタクト、今に至る。

なんというか……馬鹿だ。

危なかつた、と安堵。流石に今の行動を目撃されてしまつたら1週間は寝込んでしまいそうだ。ああ、そのあとすぐ修学旅行か……なら修学旅行もいつそサボつてしまつたほうがいいかもしれん：つて、足を蹴るな由比ヶ浜。痛い痛い痛い。俺何も言つてねえだろ。エスパーかつての。

「あ、やつはろーサイちゃん！……別に何でもないよ？」

「うす……」

由比ヶ浜は明るく、俺は対照的に暗く挨拶をした。由比ヶ浜に肘で突かれる。「そうならいいんだけど……いやあ、メールで由比ヶ浜さんと会つただなんて聞いてびっくりしたよ。凄い偶然だよね！」

「——っ！」

戸塚は爽やかスマイルでそう言つた。可愛い。そう思つた瞬間に由比ヶ浜がこちらを睨んでくる気配を感じたのですかさず視線を逸らした。

ちなみにだが、戸塚は俺たちの関係性について知らない。……いや、由比ヶ浜の失態で知つているのかもしれない。だとすれば本当にやつてくれたなお前。「ヒッキー？」

「すみません」

まあ冗談は置いておいて実際知つてているのかどうなのか気になるものの、流石にわざわざ尋ねる勇気はない。何故なら俺はス○バの注文でさえキヨドるレベルのコミュ障なのだから。

それよりも早速本題に入ろう。

……。

いやちよつと待て。そういうえば何をするのかなんて聞いてすらいなくないか。——
——なんて言つたば『だったら事前にメールで聞けばいいのに』と思われてしまふかもし
れないがぼつちを極め抜いた俺からするとそんなメールも一大事なのだ。聞いている、
と一度言つてしまつた手前、どうも送信ボタンを押しずらい。んで結局聞かずじまいで
今日を迎えてしまつたという訳である。

由比ヶ浜だけじやない。俺もしつかり馬鹿だつた。

人はこれを、バカツブルと呼ぶ。……なんか違うか？

まあ単純に考えれば何か買い物だろう。それもあるのタイミングということは修学旅
行関連の何かという可能性が高いが決めつけるのは良くない。まずは一度濁してから
尋ねるのが最適解だ。

「で、何買うんだつけ

「え？ 何が？」

既に最初から間違つていた。

「……八幡？」

「いや、その……すまん、聞いてなかつたんだがもう一度用件を言つてくれないか」

全くもう、と拗ねる戸塚はアイドルをプロデュースする音ゲーに出てくる少女そのも

のだつた。一体どんな家庭で育つたらこうなるの。

……そいや戸塚の両親ってどんな人なんだろうか。両者女性すぎてもはや百合に
……流石にねえな、うん。

「前に言つてたでしょ？全部終わつたら話すつて」

ああ。その言葉によつて記憶が呼び覚まされた。一週間前に約束したばかりではな
いか。鳥頭か俺は。

「なるほどな。それか……分かつた、約束通り教える。あのとき俺に何が起きてたのか
——長話になるけどいいか？」

「いいよ。最初からそのつもりだつたし」戸塚はにこりと微笑む。
あのとき。

戸塚にドラマツルギーとの戦闘を目撃された時、あれほど酷い仕打ちをしてしまつた
というのに、どうして見放さずにいられるのだろうか。

——友達だから。

「……んなこと分かつてんだよ」

はあ、とため息をつく。

さて、わざわざ休日を利用してまで戸塚が聞きたがつてゐる話だ。折角だから存分に
語り尽くすこととしよう。

東西東西、お立ち合い。

俺が口を閉じたのは、それから20分後の話である。

◆？◆？◆？

「……つーわけだ。南北」

「お疲れヒツキ」

南北は最後の挨拶ではねえよというツッコミがどれだけ待つても誰からも来なかつたので小つ恥ずかしくなりながら、ああ疲れた、と由比ヶ浜から差し出されたコーヒーを口に含んだ。勿論マツ缶ではないのだが流石はス○バ、なかなか悪くない。

……あれ、なんか、赤いけど本当にこれ俺のか？

莓味は確か——。

「うそ……そんなことが本当に……？」

まあ今更どうしようもない。それを喉に流し込んでからちらりと戸塚を見ると、彼の表情が呆気に包まれているのが伺えた。まああの非人間的なバトルを見てしまった以上信じないわけにはいかないのだがそうでなければ到底信じられる話ではないだろう。

だが、彼は。

「なるほど、だから言えなかつたんだね」呆氣から復活した戸塚はそう言つて微笑んだ。

「なら仕方なかつたな。ごめんね？迷惑かけちやつて」

その言葉を聞いた俺は即座に首を横に振る。

「迷惑とか一ミリたりとも思つてねえよ。むしろ感謝すらしてるのであるぞ。お前の好意を悪く思うなんて天変地異が起きてもあるわけないじやねえか。誰だそんなことする奴。地獄に行つてしまえ」

「ひ、ヒツキーなんかキモい……」

「ええ嘘……」

横から引き気味の声が聞こえてきた。関係は進展したのにそこをオブラーートに包むつもりは毛頭ないんですね。

「ははは……それで、その……」

戸塚が妙に顔を赤らめ始めた。つつてもまあ、全てを説明したわけだから3人の関係についても勿論話したのだ。そりやあ再確認したくなるのも当然であろう。てか可愛いなおい。

「2人、つていうか、その……本当に3人で付き合つてるの？」

3人——俺と由比ヶ浜と雪ノ下。改めて並べると凄いメンツだなあと感心する。その輪の中にどうして俺のような存在がいるのか、今となつても不思議で仕方がない。

「まあ、うん、そうだね、あははは……」

流石に第三者に知られるのには羞恥心があるのだろう、由比ヶ浜が戸塚同様に頬を赤めながら肯定した。可愛いなおい。

「そつか……色々聞きたいことはあるけどとりあえずおめでと、八幡！」
戸塚はとびきりの笑顔で俺たちを祝福した。

「おう」

「うんっ！ ありがとさいちやん！」

だが俺は——俺だけは気がついていた。

戸塚の表情が一瞬だけ陰つたことを。

あれはなんだつたのだろうか。

俺たちはその後しばらく駄弁つてから買い物をして、ゲーセンで遊んだりもしてからそのまま帰路へ向かつた。

時刻は午後3時。

修学旅行まで、あと約1週間。

005 水族館デート、それはフイクションである。

修学旅行とは。

日本において小学校、中学校、高等学校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校の小学部・中学部・高等部の教育や学校行事の一環として、教職員の引率により児童、生徒が団体行動で宿泊を伴う見学、研修のための旅行。特に「宿泊を伴うこと」「行き先がある程度遠隔地であること」で遠足や社会科見学とは区別され、「宿泊施設が野営地ではないこと」で野外活動と区別される。(wikipediaより抜粋)

簡単にいえばそれは文字通り「学を修める」旅行なのだ。

それなのにリア充どもはバスを降りるたびにイチャイチヤイチヤイチヤと乳繰り始め、俺たちはそれを間近で見続けなくてはならない。

妥協。それが修学旅行で学べる『学』なのだ。

そして残念なことに、俺はどうやら前者らしい。

◆?
◆?
◆?

場所は京都。

古都として昔の景観を残すこの地で、なぜか俺たちは最初に水族館を訪れていた。も

はや教師陣當すら俺たちに学ばせる気がなくて笑えてくるほどだ。大丈夫か総武高校。「では2時間後に再集合だ。遅れたら次の温泉街まで走つてこいよ」

俺のクラスの担任であり奉仕部の顧問である平塚先生は拡声器も使わずに生徒へ叫んだ。続けて、はーい、と不協和音が響く。うるさい。そしてこのアドレナリンマックスな状況下、数名が遅刻することは間違いないだろう。おそらく男子だ。

だが彼らは知らない。

平塚先生は本当に走らせる人間だということを。

ちなみに温泉街までの道はおよそ6キロである。

「どつたのヒツキー？」

後ろから名前を呼ばれて現実に引き戻される。

「あ、ああ…なんでもねえよ」

「そう？じやあ行こつか！あ、ゆきのんどこだろ…」

「どこだろうな…って」

由比ヶ浜に加勢して俺も雪ノ下を探し始めたのだが、見つけたのはそれよりもつと禍々しいものだつた。

「うわあ……」

こちらを睨んで血の涙を流す平塚先生。「お前だけは味方だと思つてたのに…」とで

も言いたげな表情だがそれに関してはアンタが仕向けたも同然だろ。こちらとしては感謝したいくらいだ。

：そういえば、俺があの時、平塚先生の『部活に入れ』を『教育委員会に訴える』なんて屁理屈で強引に蹴っていたらどうなつてたんだろうか。それはそれである意味平凡で幸福な人生を送っていたのかもしれないが今となつては想像もできない。

閑話休題。

「なあ由比ヶ浜。ここじゃ人が多いから一旦中に入ろうぜ」

「あ、そうだね。じゃあ私メールしてみる」

俺は先生の視線から逃げるようすごすこと館内へと向かつた。

その道中、由比ヶ浜が俺の手を握ろうとしてやめたのは見なかつたことにした。

可愛すぎて理性が飛びそうなんだよ。つたくもう。

にしても水族館デート、か。

「あれって架空の存在じゃなかつたのか

「あつはは…まあ私も初めてなんだけどね？…つて、あ！いたいた！おーい！ちよつとゆきのんなんで目逸らすの!?」

まだ俺が見つけられていない雪ノ下は、どうやら先週の俺と全く同じ行動をとつたらしい。

可哀想に。

あとでラムネでもあげよう。

◆？◆？◆？

「わ～見て見て！マンボウだよ!!! 気持ち悪う…」

「本人を前にそりやねえだろ…」

「けど、確かに似ているわね」

「本人を前にそりやねえだろ!？」

分かる人には「奉仕部グループ」だと理解し納得できたのかもしれないが分からない
人には分からなすぎる班。それが我々である。

その腐り目、何者だよ——こんな具合に。

加えて由比ヶ浜と俺の関係性については既に公然の事実と化しており、それが尚更そ
のグループを異色化させていた。

なんでいるんだ、雪ノ下——こんな具合に。

「…………はあ」

周囲からの目が痛い。ハリセンボンのように身体中に針が突き刺さっているような
感覚に気が滅入りそうだ。俺は誰にも気付かれないようにため息をついた。

ふと俺は水槽ではなく周囲を見る。予想通りリア充で溢れかえつており、俺の目はさらに腐った。：：：ああ、俺もこいつらと同じなんだつた：：つい本能が拒否してしまう…。「そういえば比企谷くん、土曜日は楽しかったのかしら？」

「…!？」

いやいやいやなんで知つてんのこいつ。まじで鳥肌立つただけど。
「な、な、何のことでしゆか」

無駄なことと分かつていながらも抵抗を試みる。

「あら、わからないのかしら？」彼女はにこりと微笑む。「ならもう少し直接的な言い方をしましようか。由比ヶ浜さんとのデー」

「わ、ちよ、馬鹿やめろ！ 楽しかつたから！」

そう、と自分で言つておきながら興味なさげな感想を口に出す雪ノ下。本当に何がしたいんだよ、急に大声出し始めたり：心臓止まるかと思つたじやねえか。

「…では」それでこの話題は終わりかと思ひきや、さらに雪ノ下は声を出した。
「その、わ：私とも：いつかいかしら」

「――つ！」

雪ノ下は顔を赤らめながら上目遣いで俺に問いかけた。
可愛い。脳内がそれ一色になつた。

『一色』という文字に対する謎の既視感に疑問を抱きながら俺は「考えとく」という言葉をなんとか捻り出し足を速めた。後ろから女子2名の笑い声が聞こえたためこいつらの関係性も良好なようだ。良かつた、俺のせいで不仲になつてたりしたら人間関係の難しさに再びひきこもり始める所だつた。

「おお……これはすげえな」

「綺麗……！」

「そうね……」

それから俺たちはクラゲの水槽のトンネル、お触りコーナー（無理矢理ナマコを触らせられた）、エイなどほとんど全てのブースを周り終え、残るところはあれしか残つていない。時間的にもこれを見たらお終いであろう。そう思い我々は歩き出す。

あれとは何か、なんてのは愚問だ。水族館のメインイベントと言つて差し支えないだろうし、事実俺も小町と水族館に行つた時はいつも見ていた。

そう。

「きやーーーーーーすごいすごい!! 可愛い〜〜〜!!」

イルカショーである。

あまりの可愛さに語彙力が幼稚園児と化していた。…割といつも通りか?
「比企谷くん、珍しく楽しそうね。あなたのことだから『はつ、下等生物が泳いでるのな

「んて見て何が面白いんだか』とか言いそそうだと思つていたのだけれど

『いや流石の俺でもそこまでは言わねえだろ』

俺いつもそんな感じだと思わてるのか…。

哀愁を漂わせようとした瞬間、ザバーン、と勢いよくイルカが跳ね上がり最前席の人々がブルーシートに身を寄せ合う。

俺たちが来たのはショーゲ始まる寸前だつたため前方の席は埋まつており、結局最後尾に立つこととなつたのだが、これはこれでいい眺めだ。陽キヤどもを見下……上から見るゆえにショーを全貌を見ることができ、最善席とはまた違つた楽しみ方をすることができた。

ちなみに。

恥ずかしながら俺も少しワクワクしていた。

『ミューちゃんに大きな拍手をツ!!』

それは由比ヶ浜も雪ノ下も同じであろう。普段あまり表情を動かさない雪ノ下さえも表情筋を緩ませて拍手をしている。

——ああ、幸せだ。

イルカの大ジャンプを見ながらそう感じざるを得なかつた。

006 土産屋には時折怪しいものが置かれている。

温泉街。

それは即ち観光客が多いことを指す。加えてそれは彼らを狙つた土産屋が多いことを指す。京都では特にそれが顕著に現れており、四方八方に土産屋が聳え立つていた。

「人が多い。帰る」

「ちょ、ヒツキー冗談だよね!?」由比ヶ浜が言う。

「これが冗談に見えるか?」

「?見えるけど……え、うそ本気なの?」

「冗談だ」

ぽかぽかと肩を叩かれた。全く痛くないし肩たたきにすらならないレベルだった。

つーか可愛いなおい。

さて、昼に京都に着いてから時刻は午後3時を過ぎていた。ピークは過ぎたとはいえたまだ暑さは続いている。どこかでソフトクリームでも食べたい気分だ、と思つていた矢先。

「あ!ねえねえソフトクリームあるよ!うわあ黒糖味……絶対美味しい……」

ちょうど目の前に販売している店があった。なんて偶然。いや、運命か。どちらにせよ、これは食べないわけにはいくまい。帰つたら小町にでも自慢しよう。

「じゃ、折角だし食うか」

「そうね」雪ノ下も素直に頷いた。「ああでも……悪いけれど先にトイレに行かせてもらつてもいいかしら」

「あ、じゃあ私も『ごめんヒツキ』3人分買っておいて！」

「は!? おいちよつと待つ……」

俺も行きたい、と言おうとしたが既に両者とも消えてしまつていた。全く、どうすんだ、大丈夫か俺。ワツクの注文でさえキヨドつてしまつていうのにソフトクリームなんて買えるのだろうか……いつもは小町に頼んでるからなあ。

「マジで俺小町無しで生きていけないんじやねえのか」

値段を確認し、列に並ぶ前に財布の中身を取り出そうとしたその時――

「――？」

爆音。

続いて。

「はあつ!?

ドーン、となにかが勢いよく衝突してきた。俺もその巻き添えを喰らい吹き飛ぶ。

「え——」

ちょっと待て。

何、これ。

怪異か？

死ぬのか俺。

そう思つてしまふほどの衝撃だつた。

今のは比喩でなく軽トラックのそれだ。

現に俺は今頭の後ろから血が出ており——つまるところ、俺が吸血鬼じやなかつたら死んでいたかもしけない。

一体何者だ——と立ち上がりながら投げた人物を確認しようとするもそれは叶わなかつた。

なぜか。

「あの……大丈夫ですか」

何とびっくり、飛んできたその物体は人間だつたのだ。

いや、なんでだよ。

そこでどうしてこんな大事に限つて場面で人影がなくなるんだ。

「あ……はい、大丈夫で」

「あ！おーい！いーたん大丈夫かー！」

俺の言葉を遮る、快活な女性の声が聞こえてきたため目線をそちらへ移す。そして俺は再び仰天する羽目となるのだがこればかりは仕方ないと思う。この男を投球したであろう人物が女性で——しかも全身真っ赤だつたらそら驚くだろ。いやまじで全身赤い：服はまだしも髪まで赤いって……京都の街並みとアンマッチすぎる。高い看板みたいに条例で出歩くの禁止されねえのかな。

「わりいなうちのいーたんが迷惑かけたみたいで！」

「いや、それは貴方が投げたのが悪いでしよう」

「るつせーな、私の名前を苗字で呼んだんだからこれくらい当然だろ」

「何時代の人間なんですか……それよりも急ぎましようよ哀か……潤さん。約束の時間に遅れます」

「ん？ああそういうやうだつたな。約束なんてすっかり忘れてたぜ」

「戯言ですよね？」

「どうだろうな。つーわけで少年、色々悪かつた！お詫びと言つちやなんだが名刺やる

から困つたときはいつでも連絡してくれ！じゃ！」

「あ……うつす……」

「ええ、では」

そう言つてお辞儀した少年。一見してみると礼儀正しいように見えるが違う。10
8のスキルを持つ俺にはわかる。

彼の目は俺以上に腐つっていて。

まるで感情のないような。

人生を諦めているような、そんな――

――なんて意味のない考察をしている間に彼らは消えていた。

「まじで何もないんですね……はあ、ただの日常パートかよ」

嵐のような人だ、と思いながら名刺を見る。

「袞川潤……………請負人？」

そこに書かれた文字を声に出して読み上げ、困惑する。なんだよ請負人って。奉仕部
ばかりに聞かない名前だぞ……いや、さつきのは本当に何だつたんだろうか。怪異というに
はあまりに生き生きとしていたし問題はないはずだが。いや、ある意味問題といえば問
題なのか……。

とりあえず俺から言えることはただひとつ。

「お待たせ……あれ、ソフトは？」

「あ」俺はつい目線を逸らす。「えっとですね、それはあれがあれでして……あの、お二人
とも、落ち着いて？」

「……比企谷くん？」

「テメエらまじで許さねえからな。

◆？ ◆？ ◆？

「おいひ〜！」

「やつぱりただで食べるものは美味しいわね」

「それには同感なんだけどな……」

「あのあと、罰として3人分奢られた。最悪だよほんと。請負人だかなんだか知らんがだつたら俺のソフトクリーム代くらい請け負つてくれよ……どうせ金持ちなんだろ。

今回の俺、損しかしてないぞ。

「いや、なんかごめんね？ お金今更だけど返そつか？」

「別にいい。未来への投資だと思えばギリ大丈夫」

「ギりなんだ」

「まあ、それも比企谷くんらしいといえばらしいのだけれどね」

「そうそう！ この前もさあ……」

「仲睦まじいその姿にこれは思わずほっこりしてしまった。この笑顔が見れる限り日本は平和なのかもしけなかつた。リコリスの皆様、どうか頑張ってください。

「……ん、どつたの？」

田舎のおじいちゃんのような俺の目線に気がついたのか、不思議そうに尋ねる由比ヶ浜。

俺は「なんでもねえ」と返して「ほらさっさと決めるぞ」と言つた。
我々は今、土産屋の前でストラップを見ている。

キューピーや京都のゆるキャラだと思われるヒヨコ?などご当地のさまざまなストラップが並んでおり……あれ、なんでくまモンのストラップが……?お馴染みの何故お土産店にあるのか分からぬ厨二臭満載の剣とドラゴンのストラップもある……これほんとどこにでもあるな。ということはある程度の売り上げは維持できているということなのだろうか。おいおい、日本大丈夫か。

「私これにする!」

由比ヶ浜が手に取つたのはネット民に馴染みの深い、所謂『しょぼん』のストラップだつた。まあ猫だし可愛いんだけどな。猫といえば……。

「…………つ!」キラキラした目でそのストラップを眺めている雪ノ下が俺の横にはいた。でしようね、猫だもんね。

「なあ折角だからおソロにしようぜ。ほいこれ」

「プライドが許さなかつたのか最後まで手を伸ばそとしなかつた雪ノ下に、俺はしおほんのストラップを手渡す。

「珍しいね、ヒツキーがお揃いにしようだなんて……」

「珍しいっていうか、したことないっていうか……」

「可哀想ね。まあかく言う私も初めてなのだけれど。だから嬉しいわ」

「ありがとう、と雪ノ下。その一言で、彼女の今まで罵声を全て許せたような気がした。

「……ほ、ほら、早く会計するぞ」

氣恥ずかしさを誤魔化したくて俺はレジへ急いだ。

後ろから女性陣のクスクス笑いを聞くのは、修学旅行ではこれが2度目だ。

◆◆◆?

残り時間もあと30分となつたところで俺たちは特に用事もなくあたりの雰囲気を楽しみながら散歩に興じていた。時間を無駄遣いしていると言われそうだがこれもなかなか悪くない。古都の名前は伊達ではなく、至る所に昔の日本を感じられてかなり面白い。少なくとも歩きスマホしている陽キャグループよりかはこの旅行を楽しんでいる自信があつた。この俺が楽しめるなんて予想だにしていなかつたので驚きである。

散歩を続けてかれこれ10分。さてそろそろバスへ向かおうかとなつたそのとき、由比ヶ浜が何かに惹かれて立ち止まつた。

「へえ、何これすごい可愛いじやん！」

彼女が立ち止まつたのは古い骨董品店。趣がありすぎて逆に怪しささえ感じてしま

うその建物のなかから由比ヶ浜はあるものを見つけ出した。

「猿の……手？」

そう、名札に書かれていた。加えて、『それに願い事をすると願いが叶う』と。「うさんくさ……」誰にも聞こえないようく咳いた瞬間、横から「胡散臭いわね」と通常音声の声。ちょっと雪ノ下さん？ 空気読みましょ？

「いや、でも1000円だし、これ可愛くない！？」

可愛い……か？ や、少なくとも俺の中ではしわくちゃの腕の模型を可愛いとは言わないのだが、と雪ノ下へのアイコンタクトを試みると同感よ、と帰ってきた。あらやだ以心伝心。

「ま、別に財布に支障もないんだけれど、買うなら早く買ってこいよ」

「うん、そうする！」

たたた、と店の奥へ向かつた。

「はあ……」

「あ」

「……はつ」「……ふふ」

似ていると最初に雪ノ下に出会った時にそう感じたのだが、どうやらそれは間違つていなかつたらしい。それは付き合い始めてから顕著に現れてきており、そのたびに恥ず

かしくなる。

同時に、由比ヶ浜のあの予言も正しかったのかかもしれないと思い返す。

——ゆきのんとヒツキーはいつか必ず付き合う。

俺が吸血鬼になつてなかつたとしても、別の道を辿つて雪ノ下とともに歩む結末に行きついていたのかもしれない。まあ今の関係はそれより随分と歪なものが悪くはない。つーか、むしろいいと思う。

誰も不幸にならずに生きることの何が悪いんだ。

俺はそう思う。

否——そう、思つていた。

007 せめてバスの車内くらいは落ち着いていたい。

土産屋でのあれこれを終えてついにホテルへ向かうぞ、というバスの中。

「なんでこれの可愛さが分からなかな？」

陽キャグループに包まれてでぶつぶつ呟いている由比ヶ浜を前方に確認しながら俺は窓の外に目を向けた。眠気のあまり欠伸を出しながら、しかし眠ってしまうのは何かもつたいいないような気がして景色を楽しむことにした。大分都会に近づいてきたのだろう、言わなければ京都だと分からぬほどに近未来になつてている。まあ悪くないんじやねえの。千葉ほどじやねえけどな。うん。

「ねえ、八幡」

横から聞こえた声は戸塚のものである。一瞬で目が覚めた俺は今日一番の柔軟な表情で「なんだ？」と返事をした。我ながら氣色悪い。ちよいちよい、と耳を寄越せとの合図があつたのでそれに従う。

「デートはどうだつた？」

女子のような可愛らしい囁き声とともに彼の口から漏れた生暖かい吐息が俺の耳をくすぐつた。

「——つ！」

がばつ、と俺は咄嗟に退いてしまい、戸塚に「大丈夫？」と心配されるが割と大丈夫ではない。心臓の音がうるさすぎてもう何も聞こえないまである。なるほど。これが噂のASM-Rとやらか。

なんて恐ろしい兵器なのだろう。道理で流行るわけだ——俺は感心さえ覚えてしまった。

「八幡？」

「あ：ああ、悪い。俺、耳弱いから」

「あつそりだつたんだ：ごめんね？」

「うなんだよ。そうそう耳といえばこの前な——」

「で、デートどうだつたの？」

語尾を強めて問われた。むう、誤魔化せなかつたか。俺の108の特技のうちの一つ『論点すり替え』でなんとかいけると思つたんだけどな……おい、そんな日をキラキラさせながら聞くなよ。余計に断りずらくなつちやうだらうが。あとちょっと顔赤くすんのもやめろ、うつかり手出しそうになるじやねえか。：冗談だよ？

「…オソロでこれ買った」

仕方なく俺はお土産屋で購入した京都仕様『しょぼん』を見せた。

ちなみにまだ開封していない。透明な袋に覆われた新品状態である。

「おお～可愛い～！」戸塚は自分の音のように嬉しそうな表情でそう言つた。

お前のほうが――とは言わない。

いいなあ、僕にもいつかそういう人ができるのかなあ：」

「は？ できるに決まってるだろ」

「なんで怒ってるの？」

いい加減自分の魅力に気がつけという件について、である。彼の魅力というのは即ち『可愛さ』である。だが、もし女性たちが戸塚の外見しか見なければその『好き』は猫やハムスターに対するものと同じで――その点で言えば彼の本当の内面に気がついてくれる人が現れるかどうかだけが心配である。

いや、もういつそ俺が貰つてやろうかな…。「こいつも付き合うことにしたわ」とか言つて戸塚を紹介したら2人はどんな顔をするのか…少し気になつたりもする。

――『ヒツキー：ごめん、もうついていけないや』
『比企谷くん、失望したわ』

「……。」

苦虫を噛んだような気分になつた。

最悪愛想を尽かされる可能性を考慮すると、来年のエイプリルフールにでもやるのが

無難だろう。覚えていたらの話だが。恐らく忘れる。

「そういや戸塚誰と回つてたんだ?一回もすれ違つてない気がするんだが」

「うん、僕も記憶にないから多分すれ違つて無いと思う。同じ部活の人と回つてたよ」

ほう、同じ部活の人とな。

「男子か?」

「いや、女子もいた……え、八幡!?どうして泣いてるの!?」

いかんいかん、嫉妬のあまり感情豊かになつてしまつた。抑えなければ。俺は「何でもねえよ」と再び窓の外を見る。

丁度信号が赤になりバスも止まる。

「……あ」

偶然窓の外にある人物を目撃する。誰か、なんてわざわざ問う必要もないだろう。俺に京都の知り合いなんていない。千葉の知り合いすら少ないというのに。まあそれは置いておき、その人物とは、俺に先程のお土産通りで被害を加えてきた哀川潤とやらだつた。そしてもう1人の、俺にぶつかってきた(?)青年は――。

担がれている。

「まさか、気絶してんのか?」

「はつ…まじで怪異じやねえだろうな…」

苦笑いを浮かべながらも、今後言葉を交わすことは無いだろうと気がつき、ついに全ての思考が面倒になつた。

「悪い、寝るから着いたら起こしてくれるか」

「あ、うんいいよ」

これで安心、と俺はカーテンで目隠しをしてから睡眠に入った。その瞬間『よし、ではそろそろホテルに着くから荷物の準備をしておけ』という平塚先生の爆音が聞こえ、最悪の気分になつた。

とりあえず聞かなかつたフリをしようとカーテンを固く握りしめたのだが、数十秒後にいつの間にか俺の目の前に来ていた先生に土手つ腹を殴られて永遠の眠りに誘われそうになつた。

頼むから、バスの中くらいは落ち着かせてくれ…。

008 されど休みは始まらない。

帰宅。

「おかえりお兄ちや——いやなんでいつもより目が腐つてんの!?」

「眠い。今だけは寝かせろ…」

「あいあいさー」

久しぶりの愛する妹とのハートフルな会話を終えた俺は一目さんに自室のベッドへ向かい倒れ込んだ。

ふはあ、と我ながら気持ち悪い声が出てくるが嬉しいことに、今までのよう自室に他人がいるなんてことはない。これこそが俺の望んでいた完全なぼつち世界なのだ。だから今だけは少しくらいは許容してほしいと思う。

「はあ：」俺は仰向けになつて懐かしい天井のシミを見つめる。

それにもしても疲れた。が、同時に楽しくもあつた。ホテルの同室が葉山一味だつたことを除けば基本的に充実した修学旅行になつたのではないかと思う。どうやら戸部が海老なんとかさんに振られたらしいが俺の知った話じやねえ。他人のせいで気分悪くなつてたまるかつての。

「…寝るか」

もう既に体は悲鳴を上げていて、懐かしささえ覚えてしまうこの家の空気に俺の瞼は閉じるのを我慢しきれなくなつていた。

幸運なことに明日は土曜日だ。

全力で休むことにしよう。

おやすみ。誰に言うでもなくそう呟いてから意識を海の底に沈ませた。

◆? ◆? ◆?

「ん…う…どこだ、…」

いつの間にか床に倒れていた俺は目を覚まし、立ち上がる——いや、これは夢だな、となんとなく理解する。

ふわふわと揺蕩う感覚。

そして、ありえない光景。

俺は今、雪ノ下の部屋の中にいた。なんか見覚えあると思つたわこの豪華な部屋。と

はいえ夢にまで見るほど切望した覚えはない。掃除一つでも疲れてしまいそうだし何より気が休まらない。家は安息の地であるべきだ。であれば一体どうしたことだろうか。

「…正夢とか」

ボソリとこぼしてから「ねえか」、と首を振る。それにもしそれがありえるなら同じ割合で逆夢の可能性だつてあるのだ。とやかく言つたところで意味はない。

無意味で、無価値だ。

「…あ」

不自然に開いている扉の向こうから吐息が聞こえる。おそらくは眠っている雪ノ下だろう。

——と、そう思つたのだがどうやら違うらしい。

「は——あッ…はあ…はあ…はあ」

ただの呼吸というよりは喘ぎ声のような艶めかしい雰囲気だった。
どきりと心臓が鳴る。

「…まさかな」

はは、と笑おうとするも表情が引き攣つてしまい上手く笑えない。夢だと分かつているのに、裏切られた気持ちになつてしまふ。
どうする、俺。

無論これはただの夢だ。

だが本当に見てもいいのか…?

「は…はあ…んつ…」

見たら確實に後悔するぞ。
それでも、本当に。

「た――たす、け、て」

たすけて？

喘ぎ声――つてまさか。

先程からおまけ程度の吸血鬼の嗅覚でなんとなく匂っていた血の香りは。

「雪」

雪ノ下、と叫ぼうとしたその瞬間、体がぐらりと傾いた。息が苦しい。どうしたものかと、ふと自分の腹を見るとそこには獸が爪で引っ搔いたような大きな切り傷があつた。

「か……は……ツ！」

先程の雪ノ下のように酸素を取り込もうとして必死に呼吸をするが上手く出来ない。音がなくなっていく。視界が霞んでいく。

間違いない。

雪ノ下はこいつに殺されたのだ。

いつたい誰だ、と満身創痍のなか最後に見たものは――黄色いレインコートを着た――

——猿のように毛深い腕を持つ何者かだつた。

「く、そが……」

これが現実じやなくて良かつた、と薄れゆく思考のなかで思いながら俺はゆつくりと
瞼を閉じた。

009 比企谷八幡の心は乱れ、奉仕部の波も乱れ始める。

る。

——という悪夢を見た3日後の朝。天気は晴れだが対照的に俺は至極不愉快な気持ちで登校をしていた。あの後あまり眠れていなかつたからか、心なしか頭痛がするし寝不足状態で俺の目はいつも増して濁り切っていた。

それでも、夢にしてははつきりしてたなあと思い返す。

それにしても、夢にしてははつきりしてたなあと思い返す。

まるでその場にいたと錯覚してしまいそうな感覚。

加えて、夢から覚める前に見たあの人物には心当たりがあつた。

「あ、ヒツキー！やつはろー！」

噂をすればなんとやら、で靴箱の向こうに由比ヶ浜が立っていた。いつものように軽く挨拶を返し、並んで歩く。

「……の状況、いいのか？」

「へ？何が？」

「だってお前、朝2人で登校してたら勘違いされてもおかしくねえだろ」

朝2人で登校してたら勘違いされてもおかしくねえだろ

朝2人で登校してたら勘違いされてもおかしくねえだろ

朝2人で登校してたら勘違いされてもおかしくねえだろ

朝2人で登校してたら勘違いされてもおかしくねえだろ

「？別に勘違いじゃないんだし良くない？」

何を言つているんだこいつは、と言いたげな表情を浮かべた由比ヶ浜は、そう尋ねた。
まあそななんですけどこちらとしても準備がいると言いますかなんと言いますか。て
かほんとすげえな。よくそこまでオープンに出来るわ。阿保ゆえだらうか。阿保ゆえ
だな、うん。

「てか、付き合う前から時々一緒に階段上がつたりしてたじyan。今更でしょ」

「まあ確かに」

いつも通り。そう考えることで少しは気が楽になつた気がする。先ほどから心音が
大きすぎてどうかなりそうだ。

「そういえば戸部つちからの依頼つてどう？出来そう？」

「ありや厳しいだろ。つーか、そもそもアイツでなくとも人間関係つてのは壊しやすい
割に修復すんのは難しいんだよ。例えばいじめだな。今まで仲良かつた奴がいじめっ
子側についたとするだろ。たとえその理由がいじめっ子が怖いからであつて内心では
心配していたとしてもお前はそいつを許せるか？」

「え？あー、…たしかに許せないかも」

「そういうことだ」

ま、悪の組織から救うくらいのことをするりや話は別だがな——俺は心底どうでもよ

さそうにそう呟いた。

あまりにも幼稚な考え方だったため誰にも聞こえないようになにか言葉だつたはずなのだが、由比ヶ浜にはギリギリ聞こえていたらしく。

「もうあんなことはしないでよ」と言われた。

あんなこととはどんなことだろうか、と脳内検索を行なつてしばらくしてから文化祭でのことだと思い当たつた。

自分が悪役になるという一番楽な方法。

訓練されたぼっちである俺はそれくらいで傷つかない。故にそういうふた行動も迷わずできてしまうのだ。だから保証はできないと思い、そのまま素直に「頑張る」と返した。それだけで満足だつたらしくうんうんと頷く由比ヶ浜は世界一可愛いのかもしれなかつた。

閑話休題。

修学旅行から帰つてすぐの月曜日の放課後。久しぶりの奉仕部にいきなり依頼人がやつてきた。それが由比ヶ浜も所属している、我らが2—Fの陽キヤ集団のうちの1人・戸部翔かけるだつた。

依頼内容は「関係を修復したい」。

修学旅行2日目、戸部は同じく陽キヤグループの海老名姫菜に告白し見事に碎け散つ

た。その日の夜は戸部が泣いててうるさいことこの上なかたのだがその話は置いておこう。

つまりこういうことだ。

『振られたせいでグループ内が気まずくなつており、どうにかして解消したい。』

お前が蒔いた種だろうがと言いたくなる気持ちは山々なのだが、由比ヶ浜の上目遣いにやられて結局引き受けることになつてしまつた。やはり可愛いは正義。

「…ま、善処する」

「…うん、ありがとね」由比ヶ浜は悲しげな表情を浮かべてから俯く。

「私、戸部つちのあんな顔見るの初めてで…だからどうしたらいいのか分かんないんだよね。この関係が終わつちやうのかなあつて、少し怖くて…だから、お願ひ」

瞳をうるうるさせながらの由比ヶ浜の懇願。これを断れる奴この世に存在しないだろ。

と言えるわけもなく、なるべくいつも通りに「だからやるつづつてんだろ。人の話を聞けよ」と返した。

「…ヒツキーって、優しいよね

「だろ？」

「そうね、その通りだわ」

階段の先に、ロングの女子の姿があった。というか、雪ノ下雪乃だった。

「…今、その通りって言つた？あの雪ノ下さんが俺のことを優しいって言つた？あの深窓の令嬢が？嘘だろ？何か裏があるんじやねえのか。と思つたがいつもの暴言は返つてこず、それはつまりただ褒めただけということを表していた。

「おう」

そんな思考を読まれないように由比ヶ浜にした時と同様に挨拶をする。

「…比企谷くんはもう少しまともな挨拶ができないの？」

「何言つてんだ。会話が出来ないから友達も出来ないんだろ」

「どうしてそこまで胸を張れるのかしら…まあ、貴方らしいといえば貴方らしいけど。では行きましょうか」

そう言つて雪ノ下は俺の横についた。彼女の頬は桃色に染まっていた。風邪か、なんて聞けるほどに俺は鈍感系主人公ではない。敏感どころかむしろあれこれ勘違いしてしまう救いのない男なのである。

だから、これも勘違いなのだろうか。

それとも、夢――

「…雪ノ下さん？」

「あら、何かしら」

「これこそ勘違いされると言いますか、何と言いますか？」

「だからそれも事実じゃん」由比ヶ浜が笑う。同じように雪ノ下も笑い、同時に俺はため息をつく。

それ――つまり、二股。

しかも俺が提案したことなのだから文句を言える立場ではないことは分かつてゐるのだが、なんというか、『なんだあの美少女2人に挟まれている目が腐った男は……！』みたいな視線が先ほどから突き刺さつていて痛い。むしろ痛々しいと言うべきかもしない。

だがしかし、別に嫌なわけではない。「ほれ、早く行くぞ」と言つて2人の背中を無理やり押す。2人は驚いたのち顔を見合わせながら小さく笑い合つた。仲がよろしいことで。

――と、言いたいところだったのだがそんな安いポーカーフェイスで俺の目は騙せない。

「…………。」

由比ヶ浜結衣の表情にはどこか陰りがあつたことを、俺は見逃していなかつた。

010 そして、あの夢の続きが始まる。

ガシャゴン、と馴染み深い音を立てながら自販機がマツ缶を排出する。すかさず俺はそれを回収し蓋を開けた。そしてそのまま自転車を押して歩き始める。

時刻は午後7時を過ぎていて。どうして性懲りもなくこんな真夜中に下校しているのかと問われれば、平塚先生に頼まれた用事があつて強制的に手伝わされたのだ。

いい加減自分でやれよ…。

ちなみに本日、由比ヶ浜は風邪につき休みをとっている。この時期に?と不思議に思わないでもないが早計な行動で地雷を踏んでしまってはいけない。何か伝えるにしてもメールくらいにしておこう。

それにしても人が少ない。折角だから歌でも歌おうか。夜の空気に飲み込まれないようなポップな歌がいい。ウマ娘か。ウマ娘だな、そうしよう。

「君の愛馬が♪ すきゅんどきゅん走りだ——あ」

人がいた。

しかもうまびよいしている最中である。恥ずかしいことこの上ない事実に俺の顔はあつという間にオーバーヒートした。108のスキルの一つ『隠密行動』を用いて「…つ

す」とでも言つて逃げようかと思つたのだが。

「——。——。——。——。——」

それは叶わなかつた。何故なら、それは見覚えがある人物で、だが未だ会つたことのない何者かだつたから。

「え」

俺は一体何を言おうとしたのだろうか。それすらも分からないまま、開いた口は塞がらなくなる。それは慣用句的な意味でもあり、事実でもあつた。

「がッ……!?」

何故なら俺は腹部に不意に来た衝動を堪えて酸素を取り込まなければならなかつたから。

そのパンチは脇腹を抉り、アスファルトには血が流れた。

「う……あ……！」

今のは一体なんだ。

俺が知つてゐるこいつは、こんな非人間的なスピードで動くことなんてできないし、なんなら一般の女子より運動能力が低い。

なのに今の攻撃はキッシュショット——とまでは行かないまでも、それに近しい感覚を覚えた。

その人物を俺は確かに知つていて、だけど何か違和感を覚えた。

ゆらり、ゆらりと先程のスピードとは打つて変わつて酔つ払いのように歩み寄つてくるレインコート。その顔は闇に包まれていて、引きずり込まれそうで――どこまでも不気味だった。

と、そこでようやく違和感に気がつく。むしろどうして今まで気がつかなかつたのだろうかと疑問を抱くほどに大きな違和感――そいつの腕は人間とは思えないほどに太く、猿のように毛深かつた。まるで、由比ヶ浜が修学旅行で購入していた猿の手のようだ。

「はあ……はあ……」

……不味い。

意識が、保たねえ。

視界が狭まつていく。

吸血鬼の回復能力で死ぬことはないとと思うが、寝ている間に殴られ続けたら流石に死ねる。不味い、どうする俺。どうすればこの状況を切り抜けられる。

30秒。

30秒だけでも時間を稼げたら回復も終えて逃げられるのだ。

考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ――！

「比企谷くん？」

そのとき、誰もいなかつたはずのこの場所に第三者の声が聞こえた。そのせいかレインコートも肩を震わせて動きを止める。

「ゆ……雪ノ、下、逃げ」

「逃げる？ 何から？ それよりも比企谷くん、その傷は――!?」

「は？ だ、だから、こいつから――」

いつの間にか回復していた腹を右手で労りながら左手でアイツがいる場所を指さす。

アイツがいる場所。

「は……どこに消えた？」

レインコートは少し目を離した隙に消えていた。肉脳筋キヤラかと思われたがどうやら他人に見られるのはまずいという程度の判断はできるらしい。はあ、と脱力すると再び痛みが襲ってきた。どうやらまだ完全には治っていないらしい。全盛期からすれば恐ろしい退化である。まあ俺がもしただの人間だつたら今頃すでに死んでいるのだから文句は言えまい。

「……大丈夫なの？」

俺と同じ目線まで倒れ込み、心配そうに患部を見つめる雪ノ下。どことなく猫っぽさを感じるその体勢に可愛いなあと思いつつ立ち上がる。

「大丈夫だよこんくらい。今まで雪ノ下から食らつてきた精神攻撃に比べたらなんの
こっちゃねえ」

「そうやつて軽口が叩けるのなら、本当に大丈夫なのでしょうね」
でも、と雪ノ下。

「あなたが大丈夫と言つても私は心配だわ。あなたの家、まだかなりあるし一旦うちに
くるのはどうかしら」

「いやいやいやそれはまずいつていうかなんていうか」

「何が？」

「いえ、是非お邪魔させていただきたいと思います」

今鋭い眼光まじで怖かつた：なんならさつきのレインコートよりも怖かつたわ。
漏れるかと思つた。

「つか、こんな遅くまで何やつてたんだよ」

「塾よ。もう少しでテストがあるから勉強しておかなければと思つて」

「学年順位一桁が何を言つてらっしゃいますか」

「貴方だつて国語はいいじやない。前回なんて負けてしまつたし。悔しいから今回のテ
スト勉強は国語を重点的にすることにしているの」

「やめろよ、得意教科つつても他の教科と比べたらなんだからガチ勉強されたらすぐ抜

かされるんだって」

なんて軽口を言いながら俺は別のことについてを巡らせていた。
レインコートの人物の正体。

推測、なんてものではなくそれはもはや確信に近かつた。
その腕は猿のようで。

だが、それ以外はアイツと全く同じで――――――

「それから、比企谷くん」

「あ？ なんだよ」

「勿論家族はいないのだけれど―――変な気を起さなようにな」

雪ノ下は顔を赤らめながら、にこりと微笑んだ。
うーん：出来るかなあ…。

あまりにも不安だったので俺は「善処する」とだけ呟いて歩幅を伸ばした。

011 そもそも俺が女子の部屋にいるなんてありえない。 い。

男子諸君は女性の部屋に入つたことがあるだろうか。女子が男子の、という逆も然りである。勿論だが家族は除く。義理の妹は…まあ許そう。そもそもそんなのは都市伝説みたいなものだし。2次元にしか存在しないと考えていいと思う。

まあそれはさておき。

異性の部屋というのはなかなか入りづらいものだ。

それは一体何故だろうか？

いい匂いがして緊張するからとか恋人と2人きり色々あるのだろう。くそが。だが安心してくれ。その緊張は全く恥ずべきことではないと告げておこう。

例え俺を見ろ。

男子の部屋だつて入つたことない俺に女子の部屋が緊張しないわけないじやないか。

だけどその緊張は他の人とは一線を画す。いい意味か悪い意味かは置いておいてくれ。つまりその緊張は至極当然のもので世の中には更に心拍数を上げるやつだつているのだから際立つて君がヘタレというわけではない。

で、今回俺が言えることは一つだ。

女子の部屋、めつちやいい匂いする…。

◆？◆？◆？

「上がつて頂戴」

「お、おう…」

彼女の部屋に上るのはこれで2回目だ。1回目は文化祭で雪ノ下が体調を崩したときのお見舞い。2回目が今回、というわけで。

だが最初に入った時には俺と共に由比ヶ浜もいて、そのお陰でなんとかコミュ障を発動せずにいられたのだった。

今の俺は1人である。

ざつけんな。

高級感に加え女子の部屋特有のいい匂い（アロマ？フルーツ？）のせいか、俺の心臓は先ほどからバクバクしたまま収まらない。寿命が縮んでしまいそうだ。

ちなみに雪ノ下の部屋がどのようなものかご存じない方もために説明しておくが――先ほどから部屋と言っている時点でマンションというのは想像がついていると思

うが——ただのマンションではない。高級ホテルのような内装に一見してお金持ちだとわかる。どうやら両親は県議会議員と地元中堅ゼネコンの創業家らしく、なるほど当然金持ちであると言わざるを得ない。

「服がかなり汚れているわね…」雪ノ下は俺を上から下まで見て一言。「何があつたの？」

まあ聞かれるだろうとは思っていたが本当にいきなりだな…。

「何も」

「騙されるとと思う？」

まあそりゃどうな、とため息をついた。出来ることならこの案件は俺だけで解決したかったのだ。何故なら、雪ノ下がこの事件に足を突っ込んでしまえばそれは即ち怪異に出逢うことと同じ意味を持つのだから。

一度怪異に遭った人間は再び怪異に遭いやすくなる。

もしそれが無かつたとしても、雪ノ下の人間関係は多かれ少なかれ変化を遂げる。

俺はそれを阻止したい。

なんとしてでも。

暫くの間俺が黙っていたからであろう。雪ノ下は小さくため息を吐いて背中を向い

た。

「ここに座つてくれるかしら。お茶とコーヒーどちらがいい？」

つまり、俺に飲み物を出してくれるということらしい。その中で聞き出せれば上々、といったところか。

「あ、いや別にお構いなく…」と言おうとしたのだが途端に彼女が悲しそうな顔をし始めたので即座に「お茶で」と返した。そんな表情をされてまで断る気はない。ならせめて面倒の少ないお茶の方が良いと思つたのだ。

その様子を見て彼女は微笑み、少し待つて、トリビングに俺を残した。
バタン、とドアの開く音がして俺は正真正銘の1人になる。深いため息をついて上を見上げた。思考以外に特にすることもないのだ。

ついか体の傷、もう直つてんだけどな…ここに来る前にはもう切り傷さえ残されていなかつた。さすが吸血鬼。つまりさすが俺。なんて考えつつ雪ノ下の帰還を待つた。

◆？◆？◆？

「おまたせ」

2分ほど経つてどうやく戻ってきた雪ノ下の手にはお茶——ではなく——いや
正確にはお茶なのだが——何やら古風な道具と緑の葉が入ったケースがあつた。
……え?

「えっと、雪ノ下さん、それ…」

「？お茶だけど…何か？」そう言いながらも手際良く作業を進めていく雪ノ下。力力力力、と手際良く抹茶がかき混ぜられていく。

何か？じゃねえよ。

普通お茶って言つたらティーパックとかだろ。なんでそこから作ろうとしてんだよ本格的すぎるわ。

「いやそこまで本格的なものとは思わなくてな…だつたらコーヒーで良かつたんだが」「気にしなくていいわよ。あなたは客人なのだから」

「…………」

「どうかした？」

「いや別に」

そう、と言つて抹茶を混ぜる姿は驚くほど様になつた。まさに大和撫子、と言つた感じでいつまでも見ていたくなる。てか可愛い。

まあそれは置いておいて俺が不思議に思つたことは別にある。

なんか雪ノ下さん、優しくない？

別にいつもが優しくないとは言わない。部室では完全に浮いていた俺にお茶を注いでくれるし細かい配慮もできるのだ。だが彼女は恐ろしく口が悪い。事あるごとに俺を罵倒する雪ノ下さんはどこへ行つたんですか。それ逆に怖いんですけど…?

「どうぞ」 そう言つて差し出された茶碗の中には一種のグロテスクとも言えそうな毒々しい緑をした抹茶が入つていた。飲む前から分かる苦味…いや、雪ノ下が淹れたものが格段というわけではなくあくまで一般的な苦さだ。さらに言えば普段からマツ缶——ちげえ、コーヒーを好むものからすればその苦味は嫌いじやない。むしろ良い。

「…作法とか知らねえぞ」

「別にそこまでする必要はないわよ…」

「どうか。んじやいただきます」

まずは一口頂く。

「うまっ…!？」

なんだこれ。

なんだこれ?!——程よい苦味、どころか甘みさえ感じる。隠し味に何か入れているのだろうか。美味すぎる。感動のあまり雪ノ下と茶碗を交互に見ていると彼女はおかしそうに笑つた。

「失礼…比企谷くんが子供みたいな表情をしていたから、つい」

今そんな顔してたのか。はっず。

「うるせえよ…まじで美味しいなこれ」 そう言いつつ俺は一気に全て飲み干した。

「ご馳走様でした」

「お粗末様です」

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「え、ということなのだろう。俺のことを抹茶で釣れるようなやつだと思つてんのか
お前は。俺を買収したけりやマツ缶一年分くらい用意しろ。

「つーわけで悪いな」

「そう、なら仕方ないわね」 雪ノ下は再びため息をついた。「比企谷くん。帰り道には気
をつけなさい」

「何する気なんですか…」

「な、な、何つて…その、ね」と、突然顔を真っ赤にし始めた。「か：彼女として、彼氏
が危険な目に遭うのを黙つてみてるわけには行けないとと思うの」

「分かった、全部話す」

可愛すぎるだろ！何今の上目遣い！どこで学んだんだよ、んなもん…！最悪だ。その場のノリで話すと言つてしまつたがなかなか話せる内容ではない。せめてあちらに許可を取るべきだろう…いや、俺を殺しかけた人に許可を取る必要なんてないとは思うが。

「明日」

だから俺はこう言つた。

「明日…全て話すからそれまで待つてくれ」

雪ノ下はそれを聞いて、ふつと微笑んだ。

「ええ、待つてるわ」

その表情は、恋する乙女さながらだった。

「それと、お願ひ」

「…なんだよ」

「そういうこと絡みでの隠し事はもうやめましょう」

恋人なんだから。

それは、なんとも言い難い甘美な言葉だつた。

012 由比ヶ浜結衣は力なく笑う。（前）

今までの快適な暖かさとは打って変わつて肌寒さを感じ始め、乾いた風が哀愁を乗せて吹いてくる。

そんな木曜日の放課後、俺はいつもの通学路とは異なる道を歩いていた。目的地は由比ヶ浜結衣の家である。

「…………か」

もはや隠す必要もあるまい。あの時のレインコートの正体——それは由比ヶ浜である。：というかもう既にどこかでもう言つたか？詳しくは忘れたけどまあいいか。特に支障はない。

あの時。

レインコートのフードからちらりと覗いた髪は桃色がかつた茶髪で、そんな色の髪の人間を俺は1人しか知らない。

：まあ、単に交友関係が狭いだけで他にもいるのかもしれんが。

今回はその可能性を除いて構わないだろう——というのは、勘に近いもので——だが、確実に合っている自信があつた。

「…ふう」

一度深呼吸をしてから俺はインターHonを鳴らす。部屋の中から「ピンポーン」という音が聞こえ、続いて「はいはーい」と元気な声が聞こえてきた。

暫くしてドアが開き、その声の主が姿を現す。

「あ、どう…」

「あら、ヒツキーくん！久しぶり～！」

「…っす」

彼女は由比ヶ浜の母。どのような人物かと問われれば…まあ、この親あつてあの娘ありという感じだ。要するに物凄く明るいし、美人だ。20代と言われても納得するレベルの肌の潤い。これを美人と言わずして何と言うのか俺は知らない。

「結衣なら自分の部屋にいるわよ～！さ、どうぞどうぞ！」

「…お邪魔します。あ、これ良かつたら」

「本当に!?もう氣使わなくていいのに…わ、美味しそう…！」由比ヶ浜の母は太陽のような笑みを浮かべた。「ありがとね！」

やつぱテンション高いなあ10代かよと感心しつつ靴を脱ぎ部屋に上がる。以前に一度入ったことがあるとはいっても、昨日も雪ノ下の家に上がったとはいってもやはり女子の家に上がるのには緊張がつきものだ。

「で、憑き物もいるわけだが…」
「？何が？」

「何でもありません」

微妙な親父ギヤグを言つたのち、由比ヶ浜の部屋の前にたどり着いた。ドアの前には『ゆい』というハート型のネームプレートがある。姉妹もいないんだからいらねえだろ。
「結衣、ヒツキーケくんがきたよ」

「あ、ヒツキー！：ちよ、ごめんちょっとだけ待つて！」

ドア越しに慌ただしい音が聞こえだす。それだと俺が突然やつてきたみたいな感じになつてない？ちゃんとメールもしたし返事も返つてきてますよ？

「…お待たせ」

ガハママ（？）も下へ降りてしまいそこから2分ほど経つたころ、ようやく扉が開かれる。その息切れと頬の紅葉については問わない方がいいのであろう。男女問わず自分の部屋の汚さに触れてほしい人間なんて存在しないのだ。

「…つす」

「入つてよ」

「…ああ、そうする」

入らなかつたら俺は何をしここまで来たんだよ、というツッコミはなんとなく飲み

込んで由比ヶ浜の部屋に入った。前に彼女の家に来た時はこの部屋まで来ていなかつたのだが、いやはや予想通りといべきか何というか：高校生男子が想像する乙女の部屋、みたいな感じだつた。部屋は全体的にピンクで構成されており、俺でさえ知つてゐるようなキャラクターのぬいぐるみなども沢山ある。

「…あんま見んなし、馬鹿」

既に座つている由比ヶ浜は恥ずかしげにそう言つた。だから上目遣いは反則ですつて。どこのあざとい後輩だよ。：あれ、誰だ後輩つて。部活にもいないしそんな存在いないと思うのだが。

宇宙意志を感じる。

「ここ座つて」

ぱんぱん、と自分の横の床を叩く。

叩いたその手は左手で。

そして、右手には――

「やー、久しぶりだね、ヒツキー」

「別に言うほどだろ」

「そうだつけ?」

はは、と笑つてみせる由比ヶ浜。だが、そんなものでは俺を騙せない。その笑顔の裏には何かが隠されている。

空虚な笑みだつた。

だから、俺も似た表情を浮かべながら話しかけた。

「なあ由比ヶ浜」

「…何?」

「風邪は治つたのか」

どきり、と肩が震える。分かりやすすぎて面白くなるほどだ。

だがこの現状は、ちつとも笑えない。

「あ、えっと、うん、だ、大丈夫だよ! 昼にはもう治つ」

「休んだ原因、それだろ」

俺は右手を指差して――異様に太い、包帯の巻かれた腕を指差して、そう尋ねた。

その言葉を聞いた由比ヶ浜は観念したようにため息を吐いた。

◆? ◆? ◆?

卒業式間際の今思い返せば、俺の周辺に異変が訪れたのはこれが最初かもしけない。由比ヶ浜の一件をきっかけに雪ノ下や一色や――大勢が怪異に巻き込まれる羽目に

なつた。

「ヒツキーは何でも分かるね」

「なんでもは分からねえよ。分かることだけだ」

「…ええっと、どういうこと?」

「さあな、さっぱりわからん」

「言つた本人すら分からないんだ!?:うん、そうだよ」

悲しげにそう言つた由比ヶ浜は、その包帯をするすると解いていく。全てが外されて露わになつた彼女の腕を見て、俺はこう思つた。

ああ。

やはり俺の青春ラブコメはまちがつてゐる、と。

012 由比ヶ浜結衣は力なく笑う。（後）

「いや、それ……」

包帯が外され露わになつた由比ヶ浜の右手。それは今まで見たことの無いような禍々しい——いや、正しくは一度だけ見たことがある。

なんのことはない、ただの日常の一つで。

怪異とは全く関係のない話だと思つていたのに。

『一度怪異に遭うと再び怪異に遭いやすくなる』

「それ——修学旅行で買つた』

「うん……猿の手」

由比ヶ浜の華奢で白い腕は、毛むくじやらの、まるで猿のように黒く太い腕へと変貌を遂げていた。それは偶然と言うにはあまりにも、骨董品店で由比ヶ浜が購入していた『可愛い』置物と似すぎていた。なるほど、これでは学校へ来れまい。怪異なので恐らく他者に見えることは無いだろうがそれはそれ、これはこれである。由比ヶ浜だって年頃の乙女なのだ——なんて俺が言つていいことなのか分からんが……ともかく、恥ずかしいに決まっている。

彼女の笑顔が、嘘だとすぐに分かるくらいには。

「…なんでそうなつてんの？」

そう、とは腕に同化していることである。

「分かんないよ…！」由比ヶ浜の瞳にじわりと涙が浮かぶ。

猿の手。

怪異。

分からぬ。そう思つっていたのだが、二つのワードを繋ぎ合わせることで俺は気がつく。一つだけ思い当たる節があつた、なんてわざわざ言うほどのものでは無いのだが…。そう、あれはかつて読んだ怪奇小説のタイトルで、作者名は確か――
「ジエイコブズ…？」

いやまさかな、と思いつつ、つい声に出してしまう。

しかし、声に出すことでの否が応でも現実味が増す。その説明なら全てが説明できる。
：いや、怪異な時点で現実味も何もないのだが…。

勘違いだと思いたい。だが微かな嫌な予感を感じて冷や汗が流れる。由比ヶ浜に俺の呟きが聞こえてしまつたらしく「じえい…」と尋ねられたため、説明することとなつた。以降はその説明を要約したものである。

◆？◆？◆？

『猿の手』―― W.W.ジエイコブズ

老いたホワイト夫妻と彼らの息子ハーバートは、インドの行者が作った猿の手のミイラを知り合いのモリスからもらい受けた。彼が言うには、猿の手には魔力が宿つていて、持ち主の望みを3つだけ叶える力があるらしい。だがそれは、「定められた運命を無理に変えようとすれば災いが伴う」との教訓を示すためのものであり、自分も悩まされたという理由で渡すことを渋るモリスから、ホワイトは半ば強引にもらい受けたのだった。

ホワイト夫妻の息子は200ポンド欲しいと猿の手に願つたが、彼は働いていた工場で死んでしまい、会社から弔慰金200ポンドが支払われることに。
そして。

――「息子を蘇らせてくれ」

息子を喪つて嘆き悲しむ母親が猿の手に頼んだその夜、家のドアをノックする者が現れる。恐れおののいた父親は猿の手に「息子を墓に帰してくれ」、するとノックの音はぴたりと止んだ――

◆?
◆?
◆?

何かを得ようとすれば、必ず別の何かを代償にしなければならない一つのことだな——俺は由比ヶ浜がきっと今のあらすじだけでは理解できないだろうと思い、教訓を、簡潔に分かりやすく伝えて締めくくつた。

「まあ、まさか本当に猿の手ってわけじゃあるまいし——つて由比ヶ浜? そう問い合わせようとした寸前で自身の声が、飲み込まれた唾液と共に消える。

絶句。

彼女の顔は真っ青で——あまりにも絶望に染まりすぎていた。

「…大丈」

「ヒッキー…どうしよ」

由比ヶ浜は俺の言葉を遮つて縋るように問いかけた。まるで余命を宣告されたような、吐き気を堪えるような表情で、俺を見つめる。

「私……お願いしちゃった…！」

その言葉をきつかけに堪えきれなくなつた由比ヶ浜は涙をこぼし始める。ここで慰めたりできたらいいのだろうが、生憎今の俺は混乱、呆然としてしまつていた。頭が上手く回らず、ただ疑問だけがグルグルと回り続ける。

——願つた?

——何を?

「なあ……由比ヶ浜。おまえ、あの骨董品店の人から何を聞いた」

俺は何とか言葉を絞り出して尋ねる。

由比ヶ浜は涙ながらに答える。

「ふう……骨董品店の、店員に、言われたの……これは三つだけ願いを叶えてくれる手だつて……だから、冗談半分で……ゆきのんにヒツキーを奪われたくない、つて……！」

ごめんなさい、と由比ヶ浜は再び泣き始める。

それを聞いて俺の仮説は確信に変わる。そして納得もした。

修学旅行で俺は雪ノ下、由比ヶ浜とともに周った。どちらを優先するでもなくどちらにも平等に接していたつもりだった。

つもりだつたのだ。

俺は雪ノ下と話している最中ずつと由比ヶ浜の嫉妬のこもつた目線を感じていて、だが俺にはどうすることもできないと諦め切つて気が付いていないフリをしていた。あの時何か言うべきだつた、と今更後悔してもどうしようもない。それに行動していたとしても対して状況が変わつたとも思えない。

「だから目の前のことを考えるべきなんだ……が……つて、ちょっと待てよ」

俺は不意にあることを察知する。

代償。

『比企谷八幡が死ねば雪ノ下に奪われることはない』という願い。

そして、俺の命。

もしもそれが願いに對する代償なのだとすれば俺の考えは正しかつたということになるであろう。

だとすれば。

由比ヶ浜の腕には今、『猿の手』が取り憑いていること、彼女の願いはまだ叶っていないことを考慮して一つ言えることがある。

これが何を意味しているのか。俺は理解しなければならない。

「おいおいおい……嘘だろ……」

そう――あの化物が再び俺を殺すべく襲つてくるということだ。

俺が死ぬまで、由比ヶ浜の願いを叶えるまで何度も何度も。

このままでは俺は死に、由比ヶ浜はいつまでも後悔に苛み続けるだろう。雪ノ下だつて、今までのようになりになつて――

それを阻止するために俺にできることはない。だが、由比ヶ浜にできることはあるはずだ。

人は1人で勝手に助かるだけ、である。

「由比ヶ浜」

「…なに？」

「今すぐ忍野のところに行くぞ」

学習塾跡に住むアロハシャツのおっさん。
俺たちは再び彼に依頼することになる。

013 忍野メメは、これの持ち主を知っている。

「やあ比企谷くん。待ちくたびれたよ」

「いや嘘つけ」

——と言いつつ、その言葉が嘘ではないことをなんとなく察させていた。俺がまだ吸血鬼だったころにも何度も由比ヶ浜たちの来訪を言い当てたことがあったし、何より彼の全てを見透かしたようなその態度は俺の108のスキルを使つても虚勢には見えない。どういった手段を用いているのか、それが怪異的な何かなのかさえ分からぬがこいつなら、と思えてしまつた。：いや、どうして正体不明のアロハシャツのおっさんにこれほどまでの信頼を寄せているのだろうか：。

ちらりと横目で壁にいる人物を確認する。

旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。

美しき鬼の成れの果て。

吸血鬼の搾りかす。

すう、と挨拶がわりに軽く手を擧げる。だがめぼしい反応は見られず、体育座りを徹底させていた。

いつになつたら話してくれるんだよ。お前は喧嘩中の小町か。
まあ仕方がないといえば仕方がないのかもしれんが。しかし無視されて悲しくない
はずがない。俺は近寄つて彼女の頭をぐわんぐわんさせてみる。

ぐわんぐわん。

ぐわんぐわんぐわん。

「……。」

回しすぎたのだろうか、彼女は初めて俺に反応を取る。

というか、腕を払い除けた。

「…ヒッキー？」

悲しみが増大した。

「なんでもねえよ」

「はつはー。それで比企谷くん、一体何の用事だい？　…て、ありや、団子頭ちゃんじや
ないの。やつはろー」

忍野はまるで由比ヶ浜の存在に今気が付いたかのような反応を見せ（白々しいことこ
の上ない）、由比ヶ浜お馴染みの挨拶をやつてみせた。由比ヶ浜は一瞬どう返すか迷つ
て、

「や、やつはろー…？」

と返した。

「お前ですら困惑すんなのな…」

由比ヶ浜のやつはろーなら可愛いので許せるが中年のおっさんがやつたところで何処にも需要はない。つーかそもそもやつはろーって何なんだよ。ほんと今更だけど。

「な…！馬鹿にすんなし！年上への礼儀ぐらいあるから！」

「そうか。お前誕生日いつだっけ」

「え？えーっと、6月18日」

「俺5月20日。はい敬え」

「それは流石に酷すぎない！」

嘘である。俺の実際の誕生日は8月8日で、お察しの通り八幡という名前はここから来ている。小町と違つて名付け方安直すぎるだろと苦言を呈したくなる気持ちもあるのだが割とお洒落な名前で気に入つてはいるので許容する。

「はつはー、夫婦喧嘩はよそでやつてくれ——おや、団子頭ちゃん、それ」忍野は静かにゆつくりと腕を動かし、そして最終的にある一点を指差した。

「その包帯——なかなか格好いいじゃない」

その言葉を待つていたように、由比ヶ浜はスルスルと包帯を外し、再び毛むくじやらの腕を露わにさせる。ふうん、と面白そうな表情で頷いた忍野はタバコケースからタバ

コを取り出し——宙へ投げ——そして口でキヤツチした。横で「おー」と感激する声が聞こえる。いやしなくていいから。ピュアかよ可愛いなおい。

「なるほどねえ……」

本当に。

本当にどこまでも見透かしてやがる、と俺は苦虫を噛んだ気分になつた。

◆？ ◆？ ◆？

「先に言つておくけどそれ猿の手じやないよ」

経緯を説明し終えた矢先、突然忍野はそう言い放つた。

「え」

声がハモる。目が合う。照れるの三段構えで頭がどうかなりそうだつたがいい加減忍野から見放されそうなので気を引き締め、さりげなく由比ヶ浜の腕を見る。

包帯が外された彼女の右腕は確かに禍々しい。とはいって、どこからどう見ても猿にしか見えないが……。

いや、普通にこれ猿の手じやないの？

だつたら何なんだ？

「でも忍野。猿の手つて確か『持ち主の意に沿わぬ形で願いを叶える』怪異だつたと思うんだが間違つてるか？」

「間違つてないよ?」

「なら違うかどうかなんて分かん」

「でも致命的な違いが一つある」

びし、と人差し指を天に突き出す。

怪しいホームレスなくせ、異様に様になつてゐるそのポーズはこの上なくウザつたらしかつた。

軽く戸部と並ぶレベルである。

「国」とに色々とアレンジはあるんだろうけど――少なくとも猿の手が持ち主の腕と同化するなんて聞いたこともないね」

そういうつて忍野は咥えていた煙草をゆらゆらを揺らし遊び始めた。

ああ、と俺は納得する。そもそも原作を知らない由比ヶ浜はパツとしていないうだがたしかにその通りだ。この違和感については最初から分かつており、しかしまあフイクションなんだからとどこかでなんとなく解釈を付けていた。

だけど。

だけど、もし本当に違うのだとすれば。

「じゃあ…それは一体何なんだよ」

忍野メメの口から出された俺の質問への答え。

それは猿なんて恐ろしいものではなく。

「悪魔さ」

それよりももつと——とんでもなく恐ろしいものだつた。

◆? ◆? ◆?

「その説明の前にひとつだけいいかな」忍野は再び人差し指で『いち』を表現する。「その腕の元所有者の名前とか聞いてたりするかな?」

「え? あ、あー、えっとお」

まさか自分への質問だつたと思つていなかつたらしく、突然慌てふためく由比ヶ浜。
いや、どう考へても貴方の問題なんだから貴方への質問以外ないでしようよ…。
「確か聞いたんだよね…なんだつけな…カツコいい名前だつた気がするんだけど。あ、
ヒツキー、ちょっと厨二病っぽい言葉並べていつて」

なんで厨二病と言つたら俺、みたいな漢字になつてんだよ。お前の中での俺そくなつ
てんの? こちとら厨二病はもうとつくに卒業してゐるわ。

「大天使ミカエル」

「そういうのじやない」

「龍」

「違うなあ…」

「一方通行」

「名前にそれが入つてゐるわけないよね?! ヒツキーそれ真面目に考へてる!?」

「ああ、勿論初めから至極真面目に答へてるぜ。何故なら一方通行アカセラレータは人の名前だからだ」

「いや、意味わかんないし」

だろうな。

えーとあと他に何があるだろか…名前に使われそうな厨二ワード…もつとシンプルなやつでそういうのあつた気がするんだけどな——そう思つていた矢先、答えは唐突に降つてきた。

しかしそれは自分自身から出たものではなく、他者からの言葉——つまり、忍野が導き出したものだつた。

いや、そうじやない。

忍野は最初からなんとなく検討がついていたのだろう。
でなければ流石に触診もせずその正体を確かめることなんてできまい。俺だつて一時期（厨二病時代）に都市伝説にハマつて様々な書籍を漁りまくつたがこんな悪魔は聞

いたことがない。恐らくかなりマイナーな怪異だ。
なのに何故知っているか。

可能性①は、純粹に、俺には想像がつかないほどの知識の膨大さ故。
可能性②は。

「神」
「え」
「かんぱる」

忍野メメは、じやないのかい？」

忍野メメは、これの持ち主を知っている。

014 猿は去らずにあくまで嗤い続ける。

「ひょっとしてそれは——神原、じゃないのかい？」

忍野はそう尋ねた。

いつものヘラヘラした雰囲気はどこかへ消し去り、静かに。それはどこか、エピソードを殺そうとした俺を諭したときの表情と似ていて、自然と身震いしてしまう。「……知り合いなのか？」

俺の言葉に忍野は考えるような素振りを見せる。その時にはもう素手の威圧感は嘘のように消え去っていた。

「んー、まあ知り合いといえばそうなるのかな。持ち主の姉と接点があつてさ」
まじか。こいつに女性の知り合いがいたとは思わなかつた。てつきり男だらけの謎のサークルでしつかり陰キャしていたのだとばかり……。

いやむしろ周りに女子を侍らせて誰よりもチャラチャラしていた可能性もある。どちらでも想像がついてしまうあたり、こいつのキャラの掴みづらさが窺える。

「そ、それって前に言つてた大学のサークルですか？」

由比ヶ浜も気になつたのだろう、そんな疑問を出していた。そういえば、と思い出す。

吸血鬼期間だつたか、それ以降だつたか曖昧だが以前、忍野が教えてくれたことがあつた。怪異関連のサークルに入つていて、それがきっかけでこの道に進むことを決めたのだと——踏み外したのだと。

「そうそう。神原……まあ名前は違うけど、元々僕の先輩だつたんでね。はつはー、それにしても縁つてのは凄いねえ」

言葉ではそう言つてはいるものの、忍野の顔はどこか苦々しい。どうやらその先輩に対してあまり好意的な感情は抱いていなかつたようだ。出来ることなら会いたくないが彼女も怪異絡みの仕事をしているのだとすれば、俺が怪異に関わつてはいる以上どこかで出会つてしまふかも知れない。是非とも今後は、忍野と同じ雰囲気を持つ奴が通りすがつたら回れ右させてもらうことにしよう。やれやれ、俺が回れ右する立場になるなんて思つてもいなかつたぜ。中学時代は俺がされてたからな。廊下を歩いていたら即座に道を開けてくれていたのである。どんだけ嫌われてんだよ俺。

……それにしても、このおっさんが苦手とする人物。

陽乃さんみたいなのだつたら困るけど……まあ、あんなのが2人も3人もいてたまるかという話である。

目的を達成するためには手段を選ばなかつたりニコニコ顔で恐ろしいことを言つたりする人ではあるまい。

まさかな。

ありえないありえない。

まさか受験前の人間を粉々にして文字通り地獄送りにするような恐ろしい人間ではないだろう。……信じている。

閑話休題。

「で、その悪魔って何なんだ?」

「レイニー・デビル」

忍野は怪異の名前を言い放つ。

「レイニー・デビル——その名の通り、雨合羽を着た悪魔だ」

◆? ◆? ◆?

W・W・ジェイコブス短編に出てくる、持ち主の意に添わない形で願いを叶えるいわくつきのアイテム『猿の手』の怪異——ではなく。

古くからヨーロッパに伝わる悪魔。

契約を行使する際願つた人間と同化するのが特徴で、人の惡意や嫉妬などのネガティブな感情を引き出しその願いを叶える低級悪魔。
家出した子供が雨の日に猿の群れに食い殺されたという伝承を起源に持つ。
雨降りの悪魔。

泣き虫の悪魔。

——その姿は、多くは雨合羽を着た猿で描かれる。
契約として、人の魂と引換に3つの願いを叶える。そして、3つの願いを叶え終えた時、その人間の生命と肉体と乗つ取つてしまう。

◆？◆？◆？

大方、忍野の説明はこんな感じだつたと思う。

俺は衝撃を受けた。恐らく、由比ヶ浜も。

現在の境遇と全く同じだつたのだから当然だ。

確かに今、由比ヶ浜の腕は猿——いや、悪魔——めんどくせえなもう猿でいいか——と同化している。

全くもつて何もかもがどうかしている。

だが納得はできる。何故悪魔が人の願いを、意に沿わない方法ではあれ叶えてくれるのか。それはあちら側に利益があるからに他ならない。ノーリターンで願いを叶えてくれるような甘い猿はないし、いわんや悪魔をや、である。この場合はそれが人の魂だつたのだ。なんて分かりやすい。そして、なんて恐ろしい怪異なんだろうと背筋が凍

る。

同時に三つ叶える前で良かつた、と安堵も覚える。

基礎知識は身につけた。では二つ目の質問に移ることにしよう。

「じゃあどうやつたらソイツ退治できんの？」

「おいおい退治だなんて。物騒だなあ比企谷くんは。何かいいことでもあつたのかい？」

そして、ふう、と火のついていない煙草の煙を吐くような素振りを見せてから静かにこちらを睨みつける。

自分から指を突っ込んでおいて——いささか都合が良すぎるんじゃないのかな。

ごくりと唾液を呑む音。それは果たして誰のものだつたか。

俺か、もしくは。

しかし少なくとも。

「……私は」

95 014 猿は去らずにあくまで嗤い続ける。

忍野の台詞が由比ヶ浜を責めるものだということだけは確かに、俺にはまるで悪魔の笑い声のように聞こえた。

015 それでは吸血鬼を始めよう。前

俺は視野が広く、思いつめることなんてめったにない。故に目移りもしない。

前言は固く守り、信念も変えない。

すべてを得ようとなんてせず、平穏な日常だけを望む。

それが俺だ。比企谷八幡だ。

◆? ◆? ◆?

「わ、私はそんなこと知らなくて……」「

――へえ、『知らなくて』かあ……」

はつはー、と。

忍野はいつものように笑つた。

いつものように、ごく自然に――その瞬間、世界が凍つたような感覚に陥つた。俺は身震いし、額に汗が流れ、体中の器官が俺自身に警告を告げる。しかしそれとは反して蛇に睨まれたうきぎのように体が全く動かない。

確かに今まで忍野を不気味だと思ったことがあるが、ここまでつつきりとした恐怖を感じたのは初めてだった。

忍野の言葉は完全に由比ヶ浜を責めているもので、明らかにこう言いたげな表情をしていた。

『知らない、なんて言い訳で許されるのかな?』

人がを一人殺しかけておいて。

俺を、比企谷八幡を、殺しかけていて。

あの日の夜、もしも雪ノ下が来ていなかつたら俺は今頃――。

ゾツとしなくもない。というか、マジで怖かつた。チビるかと思った。
が、しかし。

誰が悪いのか。それはただの客観的事実に過ぎない。

悪いのはあくまで――悪魔。

レイニーデヴィル。

「……忍野。俺は別に怒つてねえんだが」

「君は優しいね」忍野は、にこりと笑つた。「優しくて――イライラしてくるよ」

う、と息が詰まりそうになる。

違うと言いたくても何を反論すればいいのかわからず、結局何も言えない今まで終

わつた。

過度な優しさは無責任だ。怒らないことは一見して良いことであるかのように語られるが、それは本物ではない。もつと別の、ちょっととしたことで崩れる偽物だ。

偽物。

『本物』なんかではない。

偽物というのは今の俺のことで、だからこそ何も言い返せない。ただ唯一、「そんなんじやありませんよ俺は。もつと――もつと、腐りまくつてます」とだけなんとか返して黙つた。

忍野は俺の冗談を聞いて、『全て分かってる』とでも言いたげな笑みを浮かべた。心音が大きさを増す。ふわりと吹いた生暖かい風が気持ち悪くて仕方がなかつた。

「はつはー、確かにそうかもね」

そう笑つて、再び由比ヶ浜の方を向いた。それからじつと彼女の顔を見て黙る。次に何を発するか、見極めているかのように。いや、実際にその通りだつたのだろう。由比ヶ浜の言葉をただ待つた。

どうするべきか分かつてゐる由比ヶ浜が。

それを言葉にできるまで待ち続けた。

しばらく経つて深呼吸の音が聞こえた。そして。

「……ヒツキー」

由比ヶ浜は声を震わせながら俺を呼んだ。

「なんだ」

ゆっくり、ゆっくりと由比ヶ浜は言葉を紡いでいく。

「どうやつたら——許してくれるかな」

「っ！ だから俺は怒ってるわけじゃ」

「——違うの」

違う、とはつまり俺が怒つていないと云うことは既に分かっているということで、なら本当の意味はどこにあるのか。答えは簡単だ。由比ヶ浜は今、自分が許せていない。

俺を傷つけたことも勿論だが、一番は恐らく猿の手に願つてしまつたこと自体だ。軽い気持ちとはいえそれは願つてはいけないことだった、と自責の念を抱いている由比ヶ浜に「そんなことない」なんて無責任なことを俺は言えなかつた。その場凌ぎにはなるかもしれないかつたが、それが根本的な解決になるとは思えない。願いはジーニーに告げてしまつた時点で既に願いではない。

それは『意志』なのだ。

「こんな手、切っちゃえばいいかな」

「おい由比ヶ浜」

「ヒツキー……手伝ってくれないかな」

「由比ヶ浜ッ！」

ついあげてしまつた怒鳴り声に自分でも驚く。俺はこれほど感情的な人間だつただろうか。一体いつからこうなつてしまつたのだろうか。

俺も、由比ヶ浜も。

「そうだよね。ヒツキーの手は煩わせられないや。ごめんね。自分でするのは流石に怖いから車にでも引っ張つて貰えれば——」

「だ、から、そうじやなくて——！」

俺は再び怒鳴つた。そうじやなくて、何なのだろうか。自分でもよく分からなくなつてしまつていた。

そして、俺は忍野に尋ねる。

「おい忍野。どうやつたらこいつを退治できるんだ」

「はつはー、退治なんて、比企谷くんは元気がいいなあ、何かいいことでもあつたのかい？——ただまあ、ひとつだけ方法がないこともない」

「！ なんだよ、さつさと教えるよ」

「レイニー・デヴィルは願いを叶える——例え持ち主の意に沿わぬ形だとしても、願いを叶える怪異なんだ。だから、それが叶えられないことをレイニー・デヴィルに分からせ

ればいい」

「願いが叶えられないことの、証明」

俺はその言葉を繰り返した。この場合の願いとは、『俺を殺すこと』。俺のことを殺せないと理解して諦めてもらう。なるほどたしかに理にかなっている。だがどうやつて。「どうつて君。戦うほかにあるのかい？」

「いや、それだつて結構物騒じやねえか」
それじや人のこと言えないだろ。

お前だよ良いことあつたのは。

だけど――確かに、それしかない、とも思う。

レイニーデヴィルに格の違いを分からせてあげればいい。

吸血鬼と悪魔の差。それが一体どれほどのものなのかな素人な俺にはさっぱり分からん。故に危険な賭けではあるが。
さて、どうする俺。

「ヒツキー」

……なんて、考えるフリなんとしても、結局結論は決まつてゐるんだがな。

「やる」

その一言を聞いた忍野は、いつものように「はつはー」と笑い、「そうこなくつちやね」

と言つた。

嫌な笑みだつた。

時刻は今日の深夜十二時。
いよいよ、戦いが始まる。

015 それでは吸血鬼を始めよう。後

同日の午後12時。満月が煌々と照り輝く、怪しくも艶かしい雰囲気が漂う暗闇の中、俺と忍野メメは背中合わせで語り合っていた。

「貴重品は僕が持つといてあげるから安心しなよ」

「いや、勝手に触るなよ？」

「はっはー、信用されてないなあ。君を吸血鬼から戻してあげたのは誰だと思っているんだい？」

忍野は傷ついた様子も見せず、飄々と笑つてみせた。先程、見ていてイライラすると言つた相手に、である。この人は普通の生活を送つていたら、相当世渡り上手な人間なのだろうなと思った。まあ、今だつて各地の廃墟を点々としているという違う意味で世渡り上手ではあるが。

「早く日本でもベーシックインカムが導入されて欲しいもんだね」

「それには俺も同意だな」

「ああ。雑草だけで空腹を満たす生活が終わると思うと実に感慨深いよ」

「同意しねえよ!!」

そこまで命懸けではない。本当に何なんだその生活。今からしなりやならん戦いとどつこいどつこいじやねえか。違う。俺はただただ働きたくないだけだ。月7万円の支給だとすれば、千葉での生活は流石に困難だとしても、地方に移住すれば働かなくても余裕で生きていけるだろう。

① 働かない。

② 愛する千葉を離れる。

うわあ、何その選択……選べるわけねえだろこんちくしよう。

「…………面倒かけるな」

「いいよ」

パシ、ヒリュツクを投げる。いつも容易く空中でキヤツチをしたのを見たところ、それなりに運動能力は持ち合わせていてるらしい。なら貴方が戦ってくれればいいと思うんですけど、何故傍観者を決める気満々なんですかね……。

ああ、そうか、それでは駄目なのか。

俺が一人で戦つて。

勝つて。

それも、圧勝で完膚なきまでに叩き潰して勝つ。

そして、猿に格の差を理解させる——それがこの勝負の目的だ。誰かが勝て

ばいいなんて容易な話ではない。故にこれは世界中で俺にしか出来ない仕事。極力仕事はしたくないものの、恋人のためなら仕方あるまい。自分がこんなキザな台詞を言うとは思つても見なかつたが、彼女のためなら何でもできるとはこのことなんだなあと始めて実感した。

だから——俺が。

「行つてくる」

「あいよ」

◆? ◆? ◆?

ヒュウ、と割れた窓ガラスの隙間から肌寒い風が吹き抜ける、とある教室。かなりの広さだ。恐らく集会か何かをしていた場所なのだろう。
が、今現在ここに小学生は——人間はおらず。

「……」

「……」

ただ静かに、吸血鬼と悪魔が双方を睨んでいるのみだつた。
レイニーデビル。

W・W・ジェイコブス短編に出てくる、持ち主の「意に添わない」形で願いを叶えるいわくつきのアイテム『猿の手』の怪異——ではなく。

古くからヨーロッパに伝わる悪魔で、人の惡意や嫉妬などのネガティブな感情を引き出し、その願いを叶える低級悪魔である。家出した子供が雨の日に猿の群れに食い殺されたという伝承を起源に持つ。

その姿は、多くは雨合羽を着た猿で描かれる。

契約として、人の魂と引換に3つの願いを叶える。そして、3つの願いを叶え終えた時、その人間の生命と肉体と乗っ取ってしまう、というものである。

「なあ」

最初に動いた——言葉を発したのは、俺。

「今、どつちだ？」

しかし俺の言葉に対する返答はなく——悪魔は足を一步前に向けた。

それが返事のようなものだった。

俺も応じて動く。

が。

いつの間にか猿は目の前に——

早——

「…………つ！」

自分の身体の一部から大量のコウモリを生み出し、間一髪、猿の攻撃を防いだ。人はそれを、比企谷シールドと呼ぶ。

当然ながらこれは、吸血鬼の物体生成能力の賜物。普段は搾りかすの名に相応しいショボい力しか発揮されないが、忍野忍に血を与えた場合のみ、共に吸血鬼性が向上するのだ。そして、応用すればこんなこともできる。

「悪い、由比ヶ浜！」

比企谷ブレード。

両腕から2本の黒い刃を生成。驚きなのか停止している猿に向かつて、走り出し、そのまま切りつける。

由比ヶ浜は、悪魔は痛がる素振りを見せており、つまり今の攻撃がしつかり効いているということだ。このままならいける。勝てる。勝てる。勝てる。

そう、思っていた矢先。

「憎い」

ぼつり。

由比ヶ浜のものとは思えないほど黒い声が何かを呟いた。

憎い憎い憎い!!!

「由比、ケ浜……は!?」

ゾツとする隙もなく。

目の前。目と鼻の先。

フード姿の悪魔の眼光がこちらを睨んでいた。

コウモリを——が、間に合わない。

俺は抵抗するまでもなく、いつの間にか土手つ腹に悪魔のキックを喰らっていたのだつた。

ドン!と壁に打ち付けられ、コンクリートが綺麗な円形に凹む。余裕があつたら「ヤムチャしやがつて……」のようなボケをかますことができていたのかもしれないがそれも叶わない。敵わない。

「い…………てえ……」

ゲホ、と2、3度咳。地面上に血の色が染みた。

まさか、ここまで強いとは思つていなかつた。普段の由比ケ浜からは想像もつかない破壊力。内臓が潰れていくかもしれない。腹部が痛い。明らかに、この前より強い。一體、何故なのか――。

靴?

あの時は、恐らく、長靴。雨の惡魔なのだからそうだろうというただの憶測だが、少なくとも今とは違う。

今。

彼女の靴は。

まさか――

「ヒールかよこんちくしよう……！」

そりやあその靴で蹴られたら痛いに決まつてんだろ馬鹿野郎！
わざわざ相手を強化してどうすんだ！

「憎い憎い憎い憎い憎い！！！」

「ガハッ――」

起き上がる寸前、再びキツクが俺を襲つた。

「はあ、はあ、はあ……」

立ち上がるうと、地面に手をつく。

ぐによりと君の悪い感触。

視線を向ける。

自分の腸だつた。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

悪魔が、それを驚捆みし、引っ張る。

普通の人間なら腸は千切れて。

というか、十中八九死んでいたんだろうが、吸血鬼の不死身は内臓にまで及んでいた。千切れないと。

なら必然、

身体は引っ張られることになる。

死にはしない。

が、

中途半端に吸血鬼化した俺は、痛みを感じない境地にまでは、未だ達していない。

というか、

めちゃくちゃ痛い。

お腹が。

耳が。

目が。

鼻が。

足が。

心が。

痛い。

痛い。

痛い。

痛々しい。

ぐるぐるぐるぐると、

メリーゴーランドのように回される。

酔いなんてそんな、

生やさしいものではなく、

今にも死に絶えてしまいそうな、

されど死ねない、

中途半端な、

この状況。

風圧で耳が聞こえない。

悪魔が何か怒鳴つて いる気もするし、

怒鳴つていな氣もする。

ふわりとした氣味の悪い感覺が続く。

これでは圧勝どころか。

ただの勝利でさえ、危うい。

どうする、どうする、どうする、と振り回されながらも思考を重ねる。が、貧血でそれもままならない。

もう無理かもしけねえ——そう諦めかけたその時。

「————あら、二人して楽しそうね」

部外者の人影が、視界の片隅に見えた。

いや、部外者ではない。当事者とも言えよう。俺と由比ヶ浜と共に生きようとしている、奉仕部のメンバーの一人であり、俺の彼女。

「な、んで……」

それは俺の声だつたか、由比ヶ浜の声だつたか、不明だ。

だが一つ確かな事実がある。
手を離してしまったのである。

悪魔は遠心力で加速した僕の腸から、驚きのあまり突如

…………え、嘘ですよね？